

Title	セルボ・クロアチア語のアクセント : セルボ・クロアチア語名詞生成音韻論序説
Author(s)	神山, 孝夫
Citation	大阪外国語大学学報. 76(1-2) p.51-p.80
Issue Date	1988-11-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81198
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

On Serbo-Croatian Accentology

—Introduction to Serbo-Croatian Nominal Generative Phonology—

Takao KAMIYAMA

This paper aims at simplifying the nominal declension in present-day standard Serbo-Croatian (Štokavian dialect) with special attention to the accentual shift, which presents a really big stumbling block to the mastery of the language.

Standard Serbo-Croatian distinguishes the short (`) and long (') rising accent and the short (˘) and long (ˆ) falling one on the stressed syllable. Any preaccentual syllable is short, whereas in the postaccentual position long syllables (˘) are distinctive from short ones.

Garde (1966) introduced a splendid way of describing the prosodic features inherent in Serbo-Croatian, which is sure to simplify the prosodic system of the language: He describes the pseudo-old Štokavian at first and then presents two rules, according to which 1) the ictus on the initial syllable is materialized as the falling stress on the same syllable; 2) the ictus on the non-initial syllable is materialized as the rising stress on the preceding syllable. These rules can be illustrated in the following way, where X refers to any syllable:

$$\begin{aligned} (1-1) / ' \tilde{X} \dots / &= \tilde{X} \dots & (1-2) / ' \tilde{X} \dots / &= \tilde{X} \dots \\ (2-1) / \dots \tilde{X} ' X \dots / &= \dots \tilde{X} X \dots & (2-2) / \dots \tilde{X} ' X \dots / &= \dots \tilde{X} X \dots \end{aligned}$$

Garde's way of description is of great importance, since, above all, by employing his idea 1) one can reduce the four types of the accented syllable to the one represented by the hook (') before the accented syllabic nucleus; 2) the tonal shift can be explained in terms of the movement of the ictus (') in the phonemic scheme.

It is reported that Pavić and Daničić obtained over 200 types of the nominal declension. Matešić (1970) reduced the number down to 72, from which the author succeeded in extracting the following five elective rules applied in certain

cases as well as the six compulsory ones :

Compulsory rules

1. /...X-'Ø/>/... 'X-/ ((-) refers to the stem-ending boundary.)
2. Gpl/... \check{X} -ā/>/... \check{X} -ā/ (Gpl refers to the genitive plural.)
3. /... \check{V} #₁.../> $\begin{cases} /... \check{V}.../ & \text{(in a closed syllable)} \\ /... \check{V}.../ & \text{(in an open syllable)} \end{cases}$
4. /#₂/>/a/or/Ø/
- 4-1. /...C#₂CV.../>/...CCV.../
- 4-2. /...C#₂C.../>/...CaC.../
- 4-3. Gpl/...C#₂C-ā/>/...CaC-ā/
5. /... \check{V} #₃.../>/... \check{V} .../or/... \bar{V} .../
/ #₃/works to preserve the number of the morae of the stem.
6. /... \check{V} (#₄)...(T).../> $\begin{cases} /... \check{V} \#_4.../>/... \check{V}.../ \\ /... \bar{V}...T.../ & \text{(T refers to any element.)} \end{cases}$

Elective rules

- a. The ictus is moved to the initial syllable.
- b. The ictus is moved from the ending to the penultima of the stem.
i.e. /...XX-'.../ > /... 'XX-.../
- c. In the genitive plural in -ā the antepenult is lengthened.
i.e. /... $\check{X}\check{X}$ -ā/ > /... $\check{X}\check{X}$ -ā/
- d. The ictus is moved to the first syllable of the ending.
- e. The ictus is moved to the preceding syllable.

By employing the four imaginary phonological unit #₁ to #₄ and these rules cited above, we can explain almost all of the prosodic changes encountered in the nominal paradigm in standard Serbo-Croatian, with the exception of the variant *glāvama* fluctuating with *glávama* shown in 3.2.17. The appendix presents the phonological stems of all of the nouns handled in this paper together with the elective rules applied. (8-7-88)

セルボ・クロアチア語のアクセント⁽¹⁾ ——セルボ・クロアチア語名詞生成音韻論序説——

神 山 孝 夫

0. 序

小論は非常に複雑な様相を呈する現代セルボ・クロアチア語のアクセントを Garde (1966) の着想をヒントにして整理・規則化する試みの第1作である。ここでは名詞のみを扱う。

セルボ・クロアチア語はブルガリア語、マケドニア語、スロベニア語などと共にスラブ語の南グループを成し、ロシア語、ウクライナ語、白ロシア語より成る東グループ及びポーランド語、チェコ語、スロバキア語、ソルブ語などの属す西グループとは異なる種々の共通した特徴を持っている。小論の扱うセルボ・クロアチア語とは現在のユーゴスラビア領内のセルビアとクロアチアで主に話される言語であって、ここからセルボ・クロアチア語或はセルビア・クロアチア語と呼ばれる。この言語は「何」を意味する疑問詞として次の3語のうち何れを用いるかによって大きく *sto*, *ča*, *kaj* の3方言に分かたれ、それらのうち最も主要な *sto* 方言は古く *ѣ* (△) の文字をもって表わされていた音がどのように転じたかにより更に *e*, *je*, *i* の3方言に分類される。この言語の用いられる地域に於いて會て文語と口語とが大きく隔っていた。19世紀中葉この差異を是正すると共にセルビアで用いられていたキリール文字のうち余剰な18文字の使用を廃して国語改革を行ったのが民話の収集等でも知られる Vuk Stefanović Karadžić である。Karadžić 及び彼の後継者 Daničić が文語の規範として記した文法及び辞典は上記諸方言のうち *sto* 方言の *e* 及び *je* 方言を基盤にしている。従って特にことわらない限りセルボ・クロアチア語として言及する場合には *sto* 方言中 *e*, *je* 方言を指す。小論ではこのうち *e* 方言のみを扱うことにする。

1. セルボ・クロアチア語のアクセントの概要

西スラブ語のほとんどがアクセント一律化を蒙ってしまったのに対し、東及び南スラブ語には本来スラブ語が持っていたとされる自由な移動アクセントがよく保存されている。セルボ・クロアチア語の語強勢は所謂自由アクセントであって、語のどの音節が強勢を持つかはその形態からは判別

不可能である。それに加えて強勢音節及び強勢後の音節には長短の対立があり、強勢音節は上昇・下降の何れかの音調を持つ。次のような記号を用いる：

強勢音節：上昇・長〔ˊ〕/上昇・短〔ˋ〕/下降・長〔ˆ〕/下降・短〔˘〕

強勢後音節：長〔-〕/短〔-〕

強勢前音節：短〔-〕

ただし以下では非強勢短音節には慣用に従い特に必要のある場合を除いて〔-〕の記号を省略する。

一般に強勢音節内での音調変動が説かれているが、実はこれは必ずしも正確ではない。Lehiste (1961), Lehiste & Ivić (1963) が実験音声学的手法によって確認したことに、セルボ・クロアチア語の強勢音節に於ける音調変動は、当該の音節内での音調変動として具現されるというよりもむしろ強勢後の音節によって決定されているのである。上昇音調を持つと言われる強勢音節は高い pitch を持ち、その次には必ずそれと同じ pitch から始まり、強勢音節と殆ど等しい intensity を持つ音節が続く。一方下降音調の場合には、次音節は相対的に低い pitch 且つ極端に小さな intensity で発音される。残念なことにこの非常に有益な実験結果を無視し、殆どのテキストが昔随らの言わば張子の説明を踏襲している。

セルボ・クロアチア語のアクセントがいかに「自由か」は以下の例を見れば明らかであろう。パラダイムは N(ominativ), G(enitiv), D(ativ), A(kkusativ), I(nstrumentalis), L(okativ), V(okativ) の順序で記す。GDLipl. の異形態は省略する (3.1.24参照)。

sg.	glās	glāsa	glāsu	glās	glāsom	glāsu	glāse
pl.	glāsovi	glasová	glasòvima	glāsove	glasòvima	glasòvima	glāsovi

実にこの一つのパラダイムの中に強勢音節に現れる 4 つの音調すべてが出現し、長短音節の交替及びアクセントの移動が生じている。このような複雑な振舞いをするセルボ・クロアチア語のアクセントを把握することは全く容易なことではないことが想像されよう。

2. アクセント表記の簡略化

服部 (1981) は以前より表明していた「アクセント素」の考えを用いることによって、セルボ・クロアチア語のアクセント表記が簡略化されうことを示している。彼は「高アクセント核」/ˊ/, 「低アクセント核」/ˋ/ を立て、長音節を 2 モーラと解釈することによって A のような音形が B のように表記され、更に/ˋ/ を無標として表記を略し、/ˊ/ の代わりに/ˋ/ を用いたより抽象度の高い音韻表記 C を得ることに成功している (162f)：

A	pāra	pāra	pāra	pāru	parābola ...
B	/pāra/	/pāra/	/paāra/	/paāru/	/parābola/ ...
C	/para/	/pāra/	/paara/	/paāru/	/parābola/ ...

彼の記述には訂正すべき箇所が散見される。一例を挙げると、彼は「高アクセント核 (ˊ) は

prosodic word の第3音節以下に、低アクセント核は第2音節以下に来ない」(下線は筆者)という規則を帰納しているが(163)、下線部は「最終音節」とすべきである。これらの誤謬は彼の参照した例が極めて少数であったという事実に起因しているのであり、彼の想定自体が誤っているということではない。しかし服部の方法より遙かに良い案がある。

Ivić は1968年8月に東京言語研究所で行った講義の中で次のように述べている：

From the viewpoint of simplicity, it is more economical to describe the old system, and to add a rule at the end of the description, stating that the non-initial accent is materialized as a rise on the preceding syllable. (Ivić (1973: 127))

ここでセルボ・クロアチア語のアクセントの歴史について一言触れておく必要があろう。スラブ語が本来持っていたと想像される強勢音節の音調変動は一時セルボ・クロアチア語では失なわれた。15世紀ごろ sto 方言に於いて規則的なアクセント後退が生じ、新たにアクセントを獲得した音節は上昇音調を得、その一方アクセント後退が不可能であった本来第1音節にアクセントを持つ語はアクセント後退の代替現象として下降音調を有するに至った。このようにして下降音調は語の第1音節のみに現れ、上昇音調は最終音節以外に現れるという現代 sto 方言の制限が生じたのである。現代セルボ・クロアチア語のアクセントを生成するルールを古いアクセント後退以前の音形に該当する音韻表記から得ることは、以下で詳しく見るように、非常にいい着想であり、これによってアクセントの記述が格段に簡素化される。

筆者は Ivić によってこの方法を知ったが、最初にこの暫新な発想をしたのは Paul Garde (1966: 156ff) であると思われる：

Nous proposerons un autre procédé pour reduire à l'unité les notions d'intonation et de place de l'accent d'une façon qui simplifie l'exposé des problèmes de morphologie. Ce procédé est familier aux historiens de la langue (= le serbo-croate—T.K.), mais nous espérons montrer que son emploi est légitime aussi en synchronie et qu'il rend compte du fonctionnement vivant de la langue actuelle. (Garde (1966: 156))

そして彼の考えるルールは以下の2つである (op. cit. p. 157)：

- (1)語頭音節の強勢は同音節の下降音調として実現する
- (2)非語頭音節の強勢はその直前の音節の上昇音調として実現する

これを X を任意の音節とし、音節核直前の (') (ictus と呼んで区別する) が強勢を表すとして次のように表記する：

$$\begin{array}{ll} (1-1) / \tilde{X}.../ & = \tilde{X} & (1-2) / \tilde{X}.../ & = \tilde{X}... \\ (2-1) / ... \tilde{X}'X.../ & = ... \tilde{X}X... & (2-2) / ... \tilde{X}'X.../ & = ... \tilde{X}X \end{array}$$

この方法で上記の服部の表を書き換えると以下の D のようになる：

A	pāra	pāra	pāra	pāru	parābola ...
D	/p'ara/	/par'a/	/p'āra/	/pār'u/	/parab'ola/...

Grade, Ivić のこの記述方法が服部の方法より勝っていることは明らかである。まず第1に有標・無標の概念を導入せずに1つの記号だけを用いてセルボ・クロアチア語に通常あるとされる4つのアクセントを表記できることである。そして第2に音調の変化を ictus の移動に還元でき、従って次章で行うパターン化に最適であるということ。第3に結果として擬似的な sto 方言の祖語の形が記述され、ča 方言の語強勢位置と一致すると期待されることである。

Garde がこの記述方法を提唱した1966年には Halle の Sound Pattern of Russian も出版されて間もなく、生成音韻論がまだ確立していなかった時期である。この時期に於いて生成音韻論の方法論を示唆した Garde の着想は評価すべきであるどころか、超時代的であったと言っても過言ではないと思う。残念なことに、筆者の知る限り、この非常に有意義な着想に基いてセルボ・クロアチア語の生成音韻論を作ろうという試みはなかった。彼の論文から20余年を経て非才を顧みず筆者が小論を草する動機を得た所以である。

3. セルボ・クロアチア語名詞生成音韻論序説

セルボ・クロアチア語のアクセントを記述・整理する試みは Pavić (1881) (筆者未見) に始まると思われるが、彼は名詞に285タイプを認めていると報告されている。Daničić (1925) (筆者未見) のアクセント体系には227の名詞タイプが記され、相変わらず煩瑣の印象を禁じ得ない。⁽²⁾ Matešić (1970) は現状打解に大きな貢献を為したが、彼の提出した名詞のアクセントタイプも主なものだけで72の多数に上っている。

以下で記すのは Garde の音韻表記を用いた韻律的特徴を含めての名詞曲用タイプ削減の試みである。Matešić (1970) がパターンの代表として用いている語のみを原則として扱い、Benson (1981) との相異がある場合にはそれらを並記する。語尾の選択及び音交替については紙面の制約の為大綱を記すに留め、主として韻律的特徴を扱う。1つのパラダイムに対して1つの語幹音韻表示を対応させ、韻律的变化はすべて規則で処理するようなシステムを夢見ているが、今のところそれが不可能な場合には複数の語幹を暫定的に記す。以下のパラダイムは NGDAIL の順である。都合により V は3.4でまとめて扱う。

3.1 男性名詞

3.1.1	sg.	kōnj	kōnja	kōnju	kōnja	kōnjem	kōnju
	pl.	kōnji	kōnja	kōnjima	kōnje	kōnjima	kōnjima

Nsg/k'onj/, Gpl/kōnj'ā/ 以外の語幹は /konj-/ と表記され、Nsg に於いてのみ ictus が直前音節に移動していると考えられる。そこで語尾を Ø として Nsg を /konj'Ø/ の具現とみなし、次のようなルールを立てることができる：

$$\begin{aligned} /...X'Ø/ &> /...'X/ && \text{(規則 1)} \\ \text{Nsg/konj'Ø/} &> \text{/k'onj/} = \text{kōnj} && \text{(①は規則 1 が働いたことを示す)} \end{aligned}$$

セルボ・クロアチア語文語の Gpl はすべて ā, ī, ū の何れかに終り, 語尾 ā の直前の音節は必ず長い。これを規則 2 とする。当該の Gpl kónjā も次のように /konj-/ の具現と見られることになる:

$$\text{Gpl/konj}'\bar{a}/ >^{(2)} /k\bar{o}nj'\bar{a}/ = k\bar{o}nj\bar{a}$$

以上より上記パラダイムの成員はすべて語幹音韻表示 /konj-/ の具現とみなすことができる。

3.1.2	sg.	dvȋr	dvȋra	dvȋru	dvȋr	dvȋrom	dvȋru
	pl ₁	dvȋri	dvȋrā	dvȋrima	dvȋre	dvȋrima	dvȋrima
	pl ₂	dvȋrovi	dvȋrȋvā	dvȋrovima	dvȋrove	dvȋrovima	dvȋrovima

このパラダイムには接尾辞 -ov- を持つ pl₂ と, 同接尾辞を持たない pl₁ の 2 系列があり, 前者が一般的に用いられる。規則 1 と 2 を用いることによって成員全てが /dvȋr-/ の具現と考えられる:

$$\begin{aligned} \text{Nsg/dvȋr}'\emptyset/ &>^{(1)} /dv'\bar{o}r/ &&= dvȋr \\ \text{Gsg/dvor}'a/ &&&= dvȋra \\ \text{Gpl/dvȋr}'\bar{a}/ &&&= dvȋr\bar{a} \\ \text{Gpl}_2/\text{dvȋr}'\bar{o}v\bar{a}/ &>^{(2)} /dvȋr'\bar{o}v\bar{a}/ &&= dvȋrȋv\bar{a} \end{aligned}$$

3.1.3	sg.	kȋvāč	kovāča	kovāču	kovāča	kovāčem	kovāču
	pl.	kovāči	kovāčā	kovāčima	kovāče	kovāčima	kovāčima

Nsg を除いて /kovāč-/ という語幹音韻表示に一致することは一目瞭然であろう。Nsg も規則 1 を用いて /kovāč'∅/ と同定することができる:

$$\text{Nsg/kovāč}'\emptyset/ >^{(1)} /kov'\bar{a}č/ = kȋvāč$$

3.1.4	sg.	zmāj	zmāja	zmāju	zmāja	zmājem	zmāju	Nsg ₂ zmāj
	pl ₁	zmāji	zmājā	zmājima	zmāje	zmājima	zmājima	

Nsg には zmāj が一般的に用いられる。pl の異形態については 3.1.31 を参照。

3.1.4.1 Nsg₂ を除くすべての形態が /zm'aj-/ という語幹を持つと言える。Gpl は規則 2 によって同語幹より簡単に導ける:

$$\text{Gpl/zm}'aj\bar{a}/ >^{(2)} /zm'\bar{a}j\bar{a}/ = zmāj\bar{a}$$

3.1.4.2 問題は Nsg₂ の語幹母音延長をいかにして導くかである。他の例を検討した結果次のような説明が妥当であろうと思う。

音声環境によって先行音節核を延長する, 或は音声的実現を持たない音韻単位 /#₁/ を仮想する。/#₁/ は開音節末尾に位置する時はゼロとなり, 閉音節中では先行音節核を延長するものとする。これを任意の音節核を V として以下のように定式化する:

$$/...V\#_1.../ > /...V.../ \text{ (閉音節) 或は } /...V.../ \text{ (開音節) (規則 3)}$$

語幹が /zm'a#₁j-/ であると考えれば, Nsg₁ 以外の形態を次のように自動的に導ける:

$$\begin{aligned} \text{Nsg}_2/\text{zm}'a\#_1j/ &>^{(3)} /zm'\bar{a}j/ &&= zmāj \\ \text{Gsg/zm}'a\#_1ja/ &> /zm'aja/ &&= zmāja \\ \text{Gpl/zm}'a\#_1j\bar{a}/ &> /zm'aj\bar{a}/ &>^{(2)} /zm'\bar{a}j\bar{a}/ &&= zmāj\bar{a} \end{aligned}$$

以上より Nsg₁, Nsg₂ 両者を含んだパラダイム全体が /zm'a(ɕ)j-/ の具現と考えられる。

3.1.5	sg	vřh	vřha	vřhu	vřh	vřhom	vřhu
	pl ₁	vřsi	vřhā	vřsima	vřhe	vřsima	vřsima
	pl ₂	vřhovi	vřhōvā	vřhovima	vřhove	vřhovima	vřhovima

pl₁はすでに廃れつつあり、pl₂を用いる方が一般的である。NDILpl₁に於いて語幹末尾の h が s に転じているのは所謂第2パラタリゼーションであって、現代セルボ・クロアチア語に於いては NDILpl₁に於いて語尾或は接尾辞 i が語幹に後続する時、語幹末の g, k, h が z, c, s に交替すると定義すればよい。⁽³⁾

/ɕj-/を用いた語幹 /vrɕih-/ を考えると、このパラダイムの成員すべてが自動的に導かれる：

Nsg/vrɕih'Ø/	> ^③ /vrh'Ø/	> ^① /v'řh/	= vřh
Gsg/vrɕih'a/	> /vrh'a/		= vřha
Npl ₁ /vrɕih'i/	> /vrɕis'i/	> /vrs'i/	= vřsi
Gpl ₁ /vrɕih'ā/	> /vrh'ā/	> ^② /vřh'ā/	= vřhā
Gpl ₂ /vrɕih'ovā/	> /vrh'ovā/	> /vřh'ovā/	= vřhōvā

3.1.6	sg	jārac	jārcā	jārcu	jārca	jārcem	jārcu
	pl ₁	jārci	jārcā	jārcima	jārce	jārcima	jārcima
	pl ₂	jārčevi	jārčēvā	jārčevima	jārčeve	jārčevima	jārčevima

3.1.6.1 まずは sg と pl₁ のみについて考えてみる。

韻律の特徴を表記しなければ Nsg, Gpl₁ の語幹は jarac-, その他の形態の語幹は jarce- であって、語幹末の子音連続の間に a が生じたり、ゼロになったりしている。この a/Ø は古い Ѣ, Ъ に由来する所謂出沒母音であって、セルボ・クロアチア語では Ѣ と Ъ の差異が失われている。この出沒母音の生ずる箇所第2の仮定の音韻 /ɕj-/ を立て、次のようなルールを立てることによって、その出沒を規則的に処理することができる：

/ɕj/ > /a/ or /Ø/ (規則4)

/...CɕjCV.../ > /...CCV.../

/...CɕjC.../ > /...CaC.../

Gpl₁/...CɕjCā/ > /...CaCā/ (> ^② /...CāCā/)

次に上記規則4で出沒母音 a を得た形態 Nsg, Gpl₁には短母音が現れ、その他の形態にはすべて長母音が現れている点に着目する。この語幹母音延長は /ɕj-/ を用いて処理できる。以上より pl₂を除く上記パラダイムは語幹 /j'aɕirɕc-/ から次のように導くことができる：

Nsg/j'aɕirɕc/	> ^④ /j'aɕirac/	> ^③ /j'arac/	= jārac
Gsg/j'aɕirɕca/	> /j'aɕirca/	> /j'arca/	= jārcā
Gpl ₁ /j'aɕirɕcā/	> /j'aɕiracā/	> /j'aracā/	> ^② /j'arācā/ = jārcā

これらの諸規則は上記の順序で働くとするのが最も合理的である。

3.1.6.2 次の接尾辞 -ev- を持つ pl₂について見てみよう。

複数形に接尾辞 -ov- を挿入する場合に、単数形の語幹が軟子音 j, lj, nj, ć, d, š, ž, č, dž, št, žd, c に終る時、接尾辞 -ov- は -ev- に交替し、-ev- の前では c は ċ に交替する。

さて、pl₂を前項で用いた語幹 /j'a#₁r#₂c-/ から求めようとするとき次のような矛盾が生じる：

A B C D E

e.g. Npl₂/j'a#₁r#₂covi/ > /j'a#₁r#₂čevi/ > ^④ /j'a#₁rčevi/ > ^③ /j'arčevi/ = *jārčevi

このように実際の音形 jārčevi に正しく到達できない。上記の表を順を追って再検討してみると、A, B, C の段階にはまず問題がないとして D の段階で初めて現実の説明に不適当な表示が為されていることがわかる。すなわち /#₁/ が規則 3 の作用で先行母音を延長してしまうことが誤りである。

当該のパラダイムをもう一度よく見ると、Gpl₁以外の形態の語幹はすべて 2 モーラ（長音節は 2 モーラと解釈する）であって、Gpl₁の語幹のみが 3 モーラとなっている点が注目に値する。Gpl₁が結果的に 3 モーラとなっていることも規則 2 が最後の段階で働いたとみなせば、その直前の状態は 2 モーラであったと考える。従って、筆者のこの問題の解決法は「このパラダイムの成員の語幹は 2 モーラ性を保持する」という仮説である。

当該のパラダイムを共有する語を Matesić (1970: 54) に求めると、そこに記載されている殆ど全ての語の語幹は常に 2 モーラであり、その例外となるのは固有名詞 Pāvao と Sāvao (Nsg) の 2 例のみである。しかもこの両固有名詞 Nsg の最終音節/o/は本来/i/であったはずで、現に例えば前者の Gsg は Pāvla となり、/i/が音節末に位置する時規則的に/o/に交替した結果 Nsg の語幹のみが 3 モーラとなってしまったのである。従って、このパラダイムを共有する語はすべて語幹が本来 2 モーラ性を保っていたと言いうる。

より一般的に語幹のモーラを保持する新たな仮定の音韻 /#₃/ を立てる：

/Ṽ#₃/ > /Ṽ/ or /Ṽ/ (規則 5)

/Ṽ#₃Ṽ-/ > /ṼṼ-/ } (語幹 2 モーラの場合)

/Ṽ#₃C-/ > /ṼC-/ }

以上より、語幹に /j'a#₁r#₂c-/ を立て、規則 3 の代わりに規則 5 を用いることによって、pl₂を含めた上記パラダイムの成員全てを規則的に導くことができる：

Nsg/j'a#₁r#₂c/ > ^④ /j'a#₁rac/ > ^⑤ /j'arac/ = jārac

Gsg/j'a#₁r#₂ca/ > /j'a#₁rca/ > /j'arca/ = jārca

Npl₁/j'a#₁r#₂ci/ > /j'a#₁rçi/ > /j'arçi/ = jārçi

Npl₂/j'a#₁r#₂covi/ > /j'a#₁r#₂čevi/ > /j'a#₁rčevi/ > /j'arčevi/ = jārčevi

Gpl₁/j'a#₁r#₂cā/ > /j'a#₁racā/ > /j'aracā/ > ^② /j'arācā/ = jārācā

Gpl₂/j'a#₁r#₂covā/ > /j'a#₁r#₂čevā/ > /j'a#₁rčevā/ > /j'arčevā/ > /j'arčevā/ = jārčevā

3.1.7

sg lōnac lōnca lōncu lōnac lōncem lōncu

pl lōnci lōnācā lōncima lōnce lōncima lōncima Gpl₂ lōnācā

/#₁/ (或は/#₃/) と/#₂/を用いることにより語幹を/lo#₁n#₂c/と表示できるが、問題は ictus の位置である。単数形を無標と見て、本来語尾に ictus があると考え、Gpl₂を除く複数形に於いて ictus が語頭音節に移動したと解釈するのが最も合理的である。次の選択的規則を設ける：「ictus は初頭音節に移動する」(規則 a)。

語幹を/lo#₁n#₂c-/とし、Gpl₂以外の複数形で規則 a を用いることによってすべての形態が規則的に導ける。これを/lo#₁n#₂c-/pl.a と表記する。

Nsg/lo#₁n#₂c'Ø/ > ^④/lo#₁nac'Ø/ > ^③/lonac'Ø/ > ^①/lon'ac/ = lōnac
 Gsg/lo#₁n#₂c'a/ > /lo#₁nc'a/ > /lōnc'a/ = lōnca
 Npl/lo#₁n#₂c'i/ > /lo#₁nc'i/ > /lōnc'i/ > ^⑤/l'ōnci/ = lōnci
 Gpl₁/lo#₁n#₂c'ā/ > /lo#₁nac'ā/ > /lonac'ā/ > ^②/lonāc'ā/ > /l'onācā/ = lōnācā
 Gpl₂/lo#₁n#₂c'ā/ > /lo#₁nac'ā/ > /lonac'ā/ > /lonāc'ā/ = lonācā

3.1.8 sg òrao òrla òrlu òrla òrlom òrlu Nsg₂ òrao
 pl₁ òrli orālā òrlima òrle òrlima òrlima
 pl₂ òrlovi òrlōvā òrlovima òrlove òrlovima òrlovima

複数形には一般に pl₂の形態が、Nsg₂には Nsg₂ òrao が頻繁に用いられる。

3.1.8.1 Nsg₂, Gpl₂以外の形態は/o#₃r#₂l-/から導ける：

Nsg₁/o#₃r#₂l'Ø/ > ^④/o#₃ral'Ø/ > ^③/oral'Ø/ > ^①/or'al/ > /or'ao/ = òrao
 Gsg/o#₃r#₂l'a/ > /o#₃rl'a/ > /ōrl'a/ = òrla
 Npl₁/o#₃r#₂l'i/ > /o#₃rl'i/ > /ōrl'i/ = òrli
 Gpl₁/o#₃r#₂l'ā/ > /o#₃ral'ā/ > /oral'ā/ > ^②/orāl'ā/ = orālā
 Npl₂/o#₃r#₂l'ovi/ > /o#₃rl'ovi/ > /orl'ovi/ = òrlovi

Nsg₁に於いては3.1.6.2で触れたように音節末の/l/が/o/に転じている。Gpl₂には規則 a が働くものとすれば同様に導ける：

Gpl₂/o#₃r#₂l'ovā/ > /o#₃rl'ovā/ > /orl'ovā/ > ^②/orl'ōvā/ > ^④/orlōvā/ = òrlōvā

3.1.8.2 Nsg の異形態 òrao は明らかに単数形の他の語形からの analogy の産物だと思われるが、使用頻度の高いと思われるこの形態の生成方法を考慮しないわけにはいかない。

Nsg₂を含んだパラダイムの語幹は sg と pl₁については/ør#₂l-/、pl₂については/orl'ov-/となるが、できれば一つの語幹を得たい。pl₂に於いて接尾辞-ov- が語幹末に挿入されると初頭音節が短縮される点に着目し、第4の仮想の音韻/#₁/を導入することによって次のように処理できる。語幹を/o(#₁)r#₂l'(ov)-/と表記し、pl₂に於いて-ov- が選択されれば/#₁/は削除され、-ov- が選択されない時、先行音節核を必ず延長させる/#₁/が選択されるものとする。

$$/o(\#_1)r\#_2l'(ov)-/ = \begin{cases} /o\#_1r\#_2l'-/ > /ør\#_2l'-/ & (\text{pl}_2\text{以外}) \\ /or\#_2l'ov-/ > /orl'ov-/ & (\text{pl}_2) \end{cases}$$

これによってNsg₁以外のすべての形態を導くことができる：

Nsg ₂ /o# _{1r} # _{2l} 'Ø/	> /ör# _{2l} 'Ø/	> ^④ /ōral'Ø/	> ^① /ör'al/	> /ör'ao/	= órao
Gsg/o# _{1r} # _{2l} 'a/	> /ör# _{2l} 'a/	> /ōrl'a/			= órla
Npl ₁ /o# _{1r} # _{2l} 'i/	> /ör# _{2l} 'i/	> /ōrl'i/			= órli
Gpl ₁ /o# _{1r} # _{2l} 'ā/	> /ör# _{2l} 'ā/	> /ōral'ā/	> ^② /ōrāl'ā/		= *ōrālā > orālā
Npl ₂ /or# _{2l} 'ovi/		> /orl'ovi/			= órlovi
Gpl ₂ /or# _{2l} 'ovā/		> /orl'ovā/	> ^② /orl'ovā/	> ^④ /orl'ovā/	= örlövā

Gpl₁に於いては *ōrālā が生成されてしまうが、アクセント前音節では長短の対立が中和する為、現実の形 orālā に到達できる。

以上より古い Nsg òrao を含むパラダイムは/o#_{1r}#_{2l}'-/の、新しい Nsg órao を含むパラダイムは/o(#_{1r})#_{2l}'(ov)-/の具現とみなされることになる。

3.1.9	sg	lòvac	lòvca	lòvcu	lòvca	lòvcem	lòvcu	
	pl	lòvci	lovácā	lòvcima	lòvce	lòvcima	lòvcima	Gpl ₂ lōvācā

語幹/lo#_{3v}#_{2c}'-/からすべての形態が求められる。Gpl₂には規則 a が働く。

Nsg/lo# _{3v} # _{2c} 'Ø/	> ^④ /lo# _{3v} 'Ø/	> ^⑤ /lovac'Ø/	> ^① /lov'ac/	= lòvac
Gsg/lo# _{3v} # _{2c} 'a/	> /lo# _{3v} 'a/	> /lōvc'a/		= lòvca
Npl/lo# _{3v} # _{2c} 'i/	> /lo# _{3v} 'i/	> /lōvc'i/		= lòvci
Gpl ₁ /lo# _{3v} # _{2c} 'ā/	> /lo# _{3v} 'ā/	> /lovac'ā/	> ^② /lovāc'a/	= lovácā
Gpl ₂ /lo# _{3v} # _{2c} 'ā/	> /lo# _{3v} 'ā/	> /lovac'ā/	> /lovāc'ā/	> ^④ /l'ovācā/ = lōvācā

3.1.10	sg	sinòvac	sinòvca	sinòvcu	sinòvca	sinòvcem	sinòvcu	Nsg ₂ sinòvac
	pl	sinòvci	sinòvācā	sinòvcima	sinòvce	sinòvcima	sinòvcima	

Nsg には sinòvac ~ sinòvac のゆれがあるが、前者は amerikānac のように外来語にも現れ、より生産的であると思われる。

3.1.10.1 Nsg₂を除くパラダイムは/sinöv#_{2c}'-/から導ける：

Nsg ₁ /sinöv# _{2c} 'Ø/	> ^④ /sinövac'Ø/	> ^① /sinöv'ac/	= sinòvac
Gsg/sinöv# _{2c} 'a/	> /sinövca'/		= sinòvca

Gpl については規則 a とは異なる ictus 後退法則を設けねばならない：

/...XX'/' > /...'XX-/ (選択的規則 b)

Gpl/sinöv#_{2c}'ā/ > ^② /sinövac'ā/ > ^⑥ /sinövāc'ā/ > /sin'övācā/ = sinòvācā

3.1.10.2 Nsg₂を含むパラダイムには語幹/sino#_{3v}#_{2c}'-/を用いなければならない。ただし/#₃/はここでは語幹 3 モーラ性を保持するように先行音節核を延長したり、ゼロになったりする：

Nsg ₂ /sino# _{3v} # _{2c} 'Ø/	> ^④ /sino# _{3v} 'Ø/	> ^⑤ /sinovac'Ø/	> ^① /sinov'ac/	= sinòvac
Gsg/sino# _{3v} # _{2c} 'a/	> /sino# _{3v} 'a/	> /sinövca'/		= sinòvca

ここで問題なのが Gpl に於ける antepenultima 延長の説明である。Nsg₂の penultima の短縮を説明する為に語幹に/#₃/の存在を仮定すると、Gpl の antepenultima が短縮されてしまい、新たな

antepenultima 延長規則を設ける必要が生ずる。antepenultima を延長させる選択的規則を規則 c と呼ぶ。ただしこの規則はこのタイプの曲用のみに用いられる。

Gpl/sino #_{3v} #_{2c}'ā/ >^④ /sino #_{3vac}'ā/ >^⑤ /sinovac'ā/ >^② /sinovāc'ā/
 >^⑥ /sin'ovācā/ >^⑦ /sin'ovācā/ = sinōvācā

3.1.11	sg ₁	čov ^h ek	čov ^h eka	čov ^h eku	čov ^h eka	čov ^h ekom	čov ^h eku
	sg ₂	čov ^h ek	čov ^h ēka	čov ^h ēku	čov ^h ēka	čov ^h ēkom	čov ^h ēku

一般に sg₂ の形態が用いられる。sg₂ は語幹 /čov^hek-/ を語幹とすればよい：

Nsg₂/čov^hek'Ø/ >^① /čov^hek/ = čov^hek
 Gsg₂/čov^hek'a/ = čov^hēka

語幹を /čov^hek-/ とすると Nsg₂ と GDAILsg₁ が導かれる：

Nsg₂/čov^hek/ = čov^hek
 Gsg₁/čov^heka/ = čov^heka

Nsg₁ には ictus 後退を仮定する必要がある：

Nsg₁/čov^hek/ >^② /č'ov^hek/ = čov^hek
 Nsg₁/čov^hek'Ø/ >^③ /č'ov^hek/ = čov^hek

3.1.12	sg	děd	děda	dědu	děda	dědom	dědu
	pl ₁	dědi	dědā	dědima	děde	dědima	dědima
	pl ₂	dědovi	dědōvā	dědovima	dědove	dědovima	dědovima

接尾辞 -ov- を持つ pl₂ が一般に用いられる。語幹を /d'ed-/ とする：

Nsg/d'ed/ = děd
 Gsg/d'eda/ = děda
 Npl₁/d'edi/ = dědi
 Gpl₁/d'edā/ >^④ /d'edā/ = dědā
 Npl₂/d'edovi/ = dědovi
 Gpl₂/d'edovā/ > /d'edōvā/ = dědōvā

3.1.13	sg	svědok	svedōka	svedōku	svedōka	svedōkom	svedōku
	pl	svedōci	svedōkā	svedōcima	svedōke	svedōcima	svedōcima

NDILpl に於ける k/c の交替については3.1.5を参照。語幹を /svedok-/ とする：

Nsg/svedok'Ø/ >^① /sved'ok/ = svědok
 Gsg/svedok'a/ = svedōka
 Npl/svedok'i/ > /svedoc'i/ = svedōci
 Gpl/svedok'ā/ >^② /svedōk'ā/ = svedōkā

3.1.14	sg	nitkōv	nitkōva	nitkōvu	nitkōva	nitkōvom	nitkōvu
	pl	nitkōvi	nitkōvā	nitkōvima	nitkōve	nitkōvima	nitkōvima

語幹を/nitko#_{iv}-/'/とすればよい：

Nsg/nitko# _{iv} 'Ø/	> ^③ /nitkōv'Ø/	> ^① /nitk'ōv/	= nitkōv
Gsg/nitko# _{iv} 'a/	> /nitkov'a/		= nitkōva
Gpl/nitko# _{iv} 'ā/	> /nitkov'ā/	> ^② /nitkōv'ā/	= nitkōvā

3.1.15	sg	pās	psā	psū	psā	psōm	psū
	pl	psī	pāsā	psīma	psē	psīma	psīma

語幹を/p#_{2s}-/'/とする：

Nsg/p# _{2s} 'Ø/	> ^④ /pas'Ø/	> ^① /p'as/	= pās
Gsg/p# _{2s} 'a/	> /ps'a/		= psā
Gpl/p# _{2s} 'ā/	> /pas'ā/	> ^② /pās'ā/	= pāsā

3.1.16	sg	drūg	drūga	drūgu	drūga	drūgom	drūgu
	pl ₁	drūzi	drūgā	drūzima	drūge	drūzima	drūzima
	pl ₂	drūgovi	drūgōvā	drūgovima	drūgove	drūgovima	drūgovima

複数形には pl₂が一般に用いられる。語幹を/dr'u#_{3g}(ov)-/ (或は/dr'u(#₄)g(ov)-/) とする。

NDILpl₁の g/z については3.1.5参照。

Nsg/dr'u # _{3g} /	>	^⑤ /dr'ūg/	=	drūg
Gsg/dr'u # _{3ga} /	>	/dr'ūga/	=	drūga
Npl ₁ /dr'u # _{3gi} /	>	/dr'u # _{3zi} /	>	/dr'ūzi/ = drūzi
Npl ₂ /dr'u # _{3govi} /	>	/dr'ugovi/	=	drūgovi
Gpl ₂ /dr'u # _{3govā} /	>	/dr'ugovā/ > ^② /dr'ugōvā/	=	drūgōvā

Gpl₁では ictus が語幹の次の音節（語尾の第1音節）に移動したと考えねばならない。これを選択的規則 d と呼ぶ。

Gpl ₁ /dr'u# _{3gā} /	> /dr'ūgā/	> ^④ /drūg'ā/	= drūgā
--	------------	-------------------------	---------

3.1.17	sg	jēlen	jēlena	jēlenu	jēlena	jēlenom	jēlenu
	pl	jēleni	jēlēnā	jēlenima	jēlene	jēlenima	jēlenima

語幹を/jel'en-/とし、Gpl に於いて規則 a が働くものとする：

Nsg/jel'en/			= jēlen
Gsg/jel'ena/			= jēlena
Gpl/jel'enā/	> ^② /jel'ēnā/	> ^③ /j'elēnā/	= jēlēnā

3.1.18	sg	pōvōj	pōvoja	pōvoju	pōvōj	pōvojem	pōvoju
	pl	pōvoji	pōvōjā	pōvojima	pōvoje	pōvojima	pōvojima

語幹/pov'o#_{ij}-/'/とし、Gpl に於いて規則 a を用いる：

Nsg/pov'o# _{ij} /	> ^③ /pov'ōj/	= pōvōj
Gsg/pov'o# _{ija} /	> /pov'oja/	= pōvoja

Gpl/pov'o#ijā/ > /pov'ojā/ > ^②/pov'ōjā/ > ^③/p'ovōjā/ = pövōjā

- 3.1.19 sg prôsac prôsca prôscu prôsca prôscem prôscu
 pl prôsci prosácā prôscima prôsce prôscima prôscima Gpl₂ prôsacā

語幹を/pros#₂c'/とし、Gpl₂には規則 a を適応する：

Nsg/pros#₂c'Ø/ > ^④/prosac'Ø/ > ^①/pros'ac/ = prôsac
 Gsg/pros#₂c'a/ > /prosc'a/ = prôsca
 Gpl₁/pros#₂c'ā/ > /prosac'ā/ > ^②/prosāc'ā/ = prosácā
 Gpl₂/pros#₂c'ā/ > /prosac'ā/ > /prosāc'ā/ > ^③/pr'osacā/ = prôsacā

- 3.1.20 sg ôtac ôca ôcu ôca ôcem ôcu
 pl₁ ôci otácā ôcima ôce ôcima ôcima
 pl₂ ôčevi ôčevā ôčevima ôčeve ôčevima ôčevima

複数形には一般的に pl₂が用いられる。pl₂での接尾辞 -ev- 及び c/ć については3.1.6.2参照。語幹を/ot#₂c'/とする。*tc 及び *tć はそれぞれ c, ć に縮約される。

Nsg/ot#₂c'Ø/ > ^④/otac'Ø/ > ^①/ot'ac/ = ôtac
 Gsg/ot#₂c'a/ > /otc'a/ > /oc'a/ = ôca
 Gpl₁/ot#₂c'ā/ > /otac'ā/ > ^②/otāc'ā/ = otácā
 Npl₂/ot#₂c'evi/ > /ot#₂c'evi/ > /otč'evi/ > /oč'evi/ = ôčevi
 Gpl₂/ot#₂c'evā/ > /ot#₂c'evā/ > /otč'evā/ > ^②/otč'evā/ > /oč'evā/ = ôčevā

- 3.1.21 sg čvórak čvórka čvórku čvórka čvórkom čvórku
 pl₁ čvórci čvórakā čvórcima čvórke čvórcima čvórcima
 pl₂ čvórkovi čvórkōvā čvórkovima čvórkove čvórkovima čvórkovima

語幹を/čvör#₂k'/とし、Gpl₁に規則 a を用いる。NDILpl₁に於ける k/c については3.1.5参照。

Nsg/čvör#₂k'Ø/ > ^④/čvōrak'Ø/ > ^①/čvōr'ak/ = čvórak
 Gsg/čvör#₂k'a/ > /čvōrk'a/ = čvórka
 Gpl₁/čvör#₂k'ā/ > /čvōrak'ā/ > ^②/čvōrāk'ā/ > ^③/čv'ōrākā/ = čvórakā
 Gpl₂/čvör#₂k'ovā/ > /čvōrk'ovā/ > /čvōrk'ōvā/ = čvórkōvā

- 3.1.22 sg tuđīnac tuđīnca tuđīncu tuđīnca tuđīncem tuđīncu
 pl tuđīnci tuđīnācā tuđīncima tuđīnce tuđīncima tuđīncima

語幹を/tuđīn#₂c'/とし、Gpl に規則 b を用いる：

Nsg/tuđīn#₂c'Ø/ > ^④/tuđīnac'Ø/ > ^①/tuđīn'ac/ = tuđīnac
 Gsg/tuđīn#₂c'a/ > /tuđīnc'a/ = tuđīnca
 Gpl/tuđīn#₂c'ā/ > /tuđīnac'ā/ > ^②/tuđīnāc'ā/ > ^③/tuđ'īnācā/ = tuđīnācā

- 3.1.23 sg rät rāta rātu rät rätom rātu
 pl rätovi rätōvā rätovima rätove rätovima rätovima

/r'at-/を語幹とし、Lsg に規則 d を用いる：

Lsg/r'atu/	> ^④ /rat'u/	= rātu
Gpl/r'atovā/	> ^② /r'atōvā/	= rātōvā

3.1.24	sg	glās	glāsa	glāsu	glās	glāsom	glāsu
	pl ₁	glāsovi	glāsōvā	glāsovima	glāsove	glāsovima	glāsovima
	pl ₂	〃	glasóvā	glasóvima	〃	glasōvima	glasōvima

複数形には一般に pl₁ が思われる。語幹を /gl'a#s(ov)-/ (或は /gl'a(#i)s(ov)-/) とし、Lsg 及び GDILpl₂ には規則 d を用いる：

Nsg/gl'a#s/	> ^⑤ /gl'ās/	= glās
Lsg/gl'a#su/	> /gl'āsu/	> ^④ /glās'u/ = glāsu
Npl/gl'a#sovi/	> /gl'asovi/	= glāsovi
Gpl ₁ /gl'a#sovā/	> /gl'asovā/ > ^② /gl'asōvā/	= glāsōvā
Gpl ₂ /gl'a#sovā/	> /gl'asovā/ > /gl'asōvā/ > /glasōv'ā/	= glasóvā

3.1.25	sg	dēvēr	dēvera	dēveru	dēvera	dēverom	dēveru
	pl ₁	dēveri	dēvērā	dēverima	dēvere	dēverima	dēverima Gpl ₃ devērā
	pl ₂	dēverovi	dēverōvā	dēverovima	dēverove	dēverovima	dēverovima Gpl ₁ deverōvā

すべての形が /d'evē#ir-/ から生成される。Gpl₃, Gpl₁ には規則 d を用いる。

Nsg/d'evē#ir/	> ^③ /d'evēr/	= dēvēr
Gsg/d'evē#ira/	> /d'evera/	= dēvera
Gpl ₁ /d'evē#irā/	> /d'everā/ > ^② /d'evērā/	= dēvērā
Gpl ₃ /d'evē#irā/	> /d'everā/ > /d'evērā/ > ^④ /devēr'ā/	= devērā
Npl ₂ /d'evē#irovi/	> /d'everovi/	= dēverovi
Gpl ₂ /d'evē#irovā/	> /d'everovā/ > /d'evērōvā/	= dēverōvā
Gpl ₁ /d'evē#irovā/	> /d'everovā/ > /d'evērōvā/ > /deverōv'ā/	= deverōvā

3.1.26	sg	vītēz	vītēza	vītēzu	vītēza	vītēzom	vītēzu
	pl ₁	vītēzi	vītēzā	vītēzima	vītēze	vītēzima	vītēzima
	pl ₂	vītezovi	vītezōvā	vītezovima	vītezove	vītezovima	vītezovima
	pl ₃	〃	vitezóvā	vitezóvima	〃	vitezōvima	vitezōvima

語幹 3 モーラ性を保つ /#z/ を用いた /v'ite#z(ov)-/ (或は /v'ite(#i)z(ov)-/) を語幹とする。pl₃ には規則 d が働く。

Nsg/v'ite#z/	> ^⑤ /v'itēz/	= vītēz
Gpl ₁ /v'ite#zā/	> /v'itēzā/	= vītēzā
Gpl ₂ /v'ite#zovā/	> /v'itezovā/ > ^② /v'itezōvā/	= vītezōvā
Gpl ₃ /v'ite#zovā/	> /v'itezovā/ > /v'itezōvā/ > ^④ /vitezōv'ā/	= vitezóvā

DILpl₂/v'ite#₃zovima/ > ^⑤ /v'itezovima/ = vitezovima
 DILpl₃/v'ite#₃zovima/ > /v'itezovima/ > ^④ /vitezov'ima/ = vitezov'ima

3. 1. 27

sg	slučāj	slučāja	slučāju	slučāj	slučajem	slučāju	Lsg ₂ slučāju
pl ₁	slučāji	slučājā	slučājima	slučāje	slučājima	slučājima	
pl ₂	〃	slučājā	slučājima	〃	slučājima	slučājima	
pl ₃	slučajevi	slučajēvā	slučajevima	slučajeve	slučajevima	slučajevima	
pl ₄	〃	slučajēvā	slučajevima	〃	slučajevima	slučajevima	

語幹 3 モーラ性を保つ/ #₃/を用いた/sl'uča#₃(ev)-/ (或は/sl'uča(#₁)j(ev)-/) を語幹とする。

Lsg₂, pl₂, pl₄には規則 d が働く。

Nsg/sl'uča#₃j/ > ^⑤ /sl'učāj/ = slučāj
 Lsg₂/sl'uča#₃ju/ > /sl'učāju/ > ^④ /slučāj'u/ = slučāju
 Npl₁/sl'uča#₃ji/ > /sl'učāji/ = slučāji
 Gpl₁/sl'uča#₃jā/ > /sl'učājā/ > ^② /sl'učājā/ = slučājā
 Gpl₂/sl'uča#₃jā/ > /sl'učājā/ > /sl'učājā/ > /slučāj'ā/ = slučājā
 Npl₃/sl'uča#₃jevi/ > /sl'učajevi/ = slučajevi
 Gpl₃/sl'uča#₃jevā/ > /sl'učajevā/ > /sl'učajevā/ = slučajēvā
 Gpl₄/sl'uča#₃jevā/ > /sl'učajevā/ > /sl'učajevā/ > /slučajēv'ā/ = slučajēvā
 DILpl₁/sl'uča#₃jima/ > /sl'učājima/ = slučājima
 DILpl₂/sl'uča#₃jima/ > /sl'učājima/ > /slučāj'ima/ = slučājima
 DILpl₃/sl'uča#₃jevima/ > /sl'učajevima/ = slučajevima
 DILpl₄/sl'uča#₃jevima/ > /sl'učajevima/ > /slučajev'ima/ = slučajevima

3. 1. 28

sg	prījatelj	prījatelja	prījateljū	prījatelja	prījateljē	prījateljū
pl ₁	prījateljī	prījateljā	prījateljima	prījatelje	prījateljima	prījateljima
pl ₂	〃	prijateljā	prijateljima	〃	prijateljima	prijateljima

語幹を/pr'ijatelj-/とし, pl₂に規則 d を用いる:

Gpl₁/pr'ijateljā/ > ^② /pr'ijateljā/ = prījateljā
 Gpl₂/pr'ijateljā/ > /pr'ijateljā/ > ^④ /prijatelj'ā/ = prijateljā
 DILpl₁/pr'ijateljima/ = prījateljima
 DILpl₂/pr'ijateljima/ > /prijatelj'ima/ = prijateljima

3. 1. 29

sg	vāl	vāla	vālu	vāl	vālom	vālu
pl ₁	vāli	vālā	vālīma	vāle	vālīma	vālīma
pl ₂	vālovi	vālōvā	vālovima	vālove	vālovima	vālovima

sg 及び pl₁の形態は/v'al-/を語幹とすることによって導ける (もちろん Lsg には規則 d が働く)。

pl₂には/vāl'ov-/という別の語幹を立てねばならないが, これらの両者は語幹の最終音節に ictus を

持つという点で共通している。そこで次のような表記を採用しようと思う。

$$/X_1(X_2)/ = \begin{cases} /'X_1-/ & \\ /X_1'X_2-/ & \end{cases} \quad /v\bar{a}l(ov)-/ = \begin{cases} /v'\bar{a}l-/ & (pl_2 \text{以外}) \\ /v\bar{a}l'ov-/ & (pl_2) \end{cases}$$

Nsg/v'\bar{a}l/		=	v\bar{a}l
Lsg/v'\bar{a}lu/	> ④ /v\bar{a}l'u/	=	v\bar{a}lu
Npl ₂ /v\bar{a}l'ovi/		=	v\bar{a}lovi
Gpl ₂ /v\bar{a}l'ov\bar{a}/	> ② /v\bar{a}l'ov\bar{a}/	=	v\bar{a}lov\bar{a}

3.1.30	sg	būbanj	būbnja	būbnju	būbanj	būbnjem	būbnju
	pl ₁	būbnji	būbānjā	būbnjima	būbnje	būbnjima	būbnjima
	pl ₂	būbnjevi	būbnjēvā	būbnjevima	būbnjeve	būbnjevima	būbnjevima

語幹を/b'u(#₁)b #₂nj(ev)-/と表記する。

$$/b'u(#_1)b #_2nj(ev)-/ = \begin{cases} /b'u #_1b #_2nj-/ & (pl_2 \text{以外}) \\ /b'ub #_2njev-/ & (pl_2) \end{cases}$$

Nsg/b'u # ₁ b # ₂ nj/	> ④ /b'ūbanj/	=	būbanj
Gsg/b'u # ₁ b # ₂ nja/	> /b'ūbnja/	=	būbnja
Gpl ₁ /b'u # ₁ b # ₂ njā/	> /b'ūbanjā/	> ② /b'ūbānjā/	= būbānjā
Gpl ₂ /b'ub # ₂ njevā/	> /b'ubnjēvā/	> /b'ubnjēvā/	= būbnjēvā

3.1.31	pl ₂	zmājevi	zmājēvā	zmājevima	zmājeve	zmājevima	zmājevima
--------	-----------------	---------	---------	-----------	---------	-----------	-----------

zmāj~zmāj の複数形の異形態を Matešić は別個に扱っている。3.1.4のパラダイムは/zm'a(#₁)j-/で処理できたが、ここでは接尾辞 -ev- に ictus を移動した語幹/zma(#₁)j'ev-/が必要になる。これらの語幹を3.1.29で採用した表記法を用いて次のように単一に表示できる：

$$/zma(#_1)j(\bar{e}v)-/ = \begin{cases} /zm'a(#_1)j-/ & (pl_2 \text{以外}) \\ /zma(#_1)j'ev-/ > /zmaj'ev-/ & (pl_2) \end{cases}$$

3.1.32	sg	starāčac	starāčca	starāčcu	starāčca	starāčcem	starāčcu
	pl	starāčci	stāračcā	starāčcima	starāčce	starāčcima	starāčcima

/starāč #₂c'-/を語幹とし、Gpl に規則 b を用いる：

$$\begin{aligned} \text{Nsg/starāč #}_2\bar{c}'\emptyset/ &> \text{④ /starāčac'\emptyset/} > \text{① /starāč'ac/} &= \text{starāčac} \\ \text{Gsg/starāč #}_2\bar{c}'a/ &> \text{/starāčc'a/} &= \text{starāčca} \\ \text{Gpl/starāč #}_2\bar{c}'\bar{a}/ &> \text{/starāčc\bar{a}'\bar{a}/} > \text{② /starāčc\bar{a}'\bar{a}/} > \text{③ /star'ačcāc\bar{a}'\bar{a}/} &= \text{stāračcā} \end{aligned}$$

3.1.33	sg	koṭālac	kōtaoca	kōtaocu	koṭālac	kōtaocem	kōtaocu
	pl	kōtaoci	kōtalācā	kōtaocima	kōtaoce	kōtaocima	kōtaocima

i/o の交替については3.1.6.2参照。この音交替を生じない形 (e.g. Gsg kōtalca) も不可解なことに存在している。⁽⁴⁾ Gpl を除いて ictus は常に語幹の最終音節にあると考えられることから、語幹を次のように単一に表示できる。Gpl で ictus は一音節前に移る (規則 e とする)：

$$\begin{aligned}
/kotal\#_{2c}/ &= \begin{cases} /kotal'ac-/ & (\text{Nsg, Gpl}) \\ /kot'alc-/ & (\text{その他}) \end{cases} \\
\text{Nsg}/kotal\#_{2c}/ &>^{(4)} /kotal'ac/ &= kot\acute{a}lac \\
\text{Gsg}/kotal\#_{2ca}/ &> /kot'alca/ &> /kot'aoca/ = k\acute{o}taoca \\
\text{Gpl}/kotal\#_{2c\acute{a}}/ &> /kotal'ac\acute{a}/ >^{(2)} /kotal'\acute{a}c\acute{a}/ >^{(6)} /kot'al\acute{a}c\acute{a}/ = k\acute{o}tal\acute{a}c\acute{a}
\end{aligned}$$

3.2 女性名詞

$$\begin{aligned}
3.2.1 \quad & \text{sg} \quad \text{sm}\acute{r}\acute{t} \quad \text{sm}\acute{r}\acute{t}\acute{i} \quad \text{sm}\acute{r}\acute{t}\acute{i} \quad \text{sm}\acute{r}\acute{t} \quad \text{sm}\acute{r}\acute{t}\acute{i} \quad \text{sm}\acute{r}\acute{t}\acute{i} \quad \text{Isg}_2 \text{ sm}\acute{r}\acute{c}\acute{u} \\
& \text{pl} \quad \text{sm}\acute{r}\acute{t}\acute{i} \quad \text{sm}\acute{r}\acute{t}\acute{i} \quad \text{sm}\acute{r}\acute{t}\acute{i}\text{ma} \quad \text{sm}\acute{r}\acute{t}\acute{i} \quad \text{sm}\acute{r}\acute{t}\acute{i}\text{ma} \quad \text{sm}\acute{r}\acute{t}\acute{i}\text{ma}
\end{aligned}$$

Isg₂には本来の語尾 ju を持つ sm¹r¹c¹u (*tj>ć) と他の形態からの analogy による sm¹r¹t¹i とがある。Gpl に語尾 -i, -ū が用いられる場合には規則 2 の penultima 延長法則は働かない。語幹を/sm¹r¹t-/とし、Gpl で規則 d が働くとするばよい：

$$\begin{aligned}
\text{Isg}_2/\text{sm}'\text{rtju}/ &> /sm'\text{r}\acute{c}\acute{u}/ &= \text{sm}\acute{r}\acute{c}\acute{u} \\
\text{Gpl}/\text{sm}'\text{rt}\acute{i}/ &>^{(4)} /sm\text{rt}'\acute{i}/ &= \text{sm}\acute{r}\acute{t}\acute{i}
\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
3.2.2 \quad & \text{sg} \quad k\acute{o}st \quad k\acute{o}st\acute{i} \quad k\acute{o}st\acute{i} \quad k\acute{o}st \quad k\acute{o}st\acute{i} \quad k\acute{o}st\acute{i} \quad \text{Isg}_2 k\acute{o}š\acute{c}\acute{u} \quad \text{Lsg}_2 k\acute{o}st\acute{i} \\
& \text{pl} \quad k\acute{o}st\acute{i} \quad k\acute{o}st\acute{i} \quad k\acute{o}st\acute{i}\text{ma} \quad k\acute{o}st\acute{i} \quad k\acute{o}st\acute{i}\text{ma} \quad k\acute{o}st\acute{i}\text{ma} \quad \text{Gpl: } k\acute{o}st\acute{i}\text{ju}
\end{aligned}$$

Isg₂に於いて *stj>šć が生ずる。語幹を/k'o#_{1st}/とし、Lsg₂, GDILpl で規則 d を用いる：

$$\begin{aligned}
\text{Nsg}/k'o\#_{1st}/ &>^{(3)} /k'\acute{o}st/ &= k\acute{o}st \\
\text{Isg}_2/k'o\#_{1stju}/ &> /k'o\#_{1š\acute{c}\acute{u}}/ > /k'oš\acute{c}\acute{u}/ &= k\acute{o}š\acute{c}\acute{u} \\
\text{Lsg}_2/k'o\#_{1sti}/ &> /k'\acute{o}st\acute{i}/ >^{(4)} /k\acute{o}st'\acute{i}/ &= k\acute{o}st\acute{i} \\
\text{Gpl}/k'o\#_{1st\acute{i}}/ &> /k'\acute{o}st\acute{i}/ > /k\acute{o}st'\acute{i}/ &= k\acute{o}st\acute{i} \\
\text{DILpl}/k'o\#_{1stima}/ &> /k'\acute{o}stima/ > /k\acute{o}st'\acute{i}ma/ &= k\acute{o}stima
\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
3.2.3 \quad & \text{sg} \quad \text{stv}\acute{a}r \quad \text{stv}\acute{a}r\acute{i} \quad \text{stv}\acute{a}r\acute{i} \quad \text{stv}\acute{a}r \quad \text{stv}\acute{a}r\acute{i} \quad \text{stv}\acute{a}r\acute{i} \quad \text{Isg}_2 \text{ stv}\acute{a}r\text{ju} \\
& \text{pl} \quad \text{stv}\acute{a}r\acute{i} \quad \text{stv}\acute{a}r\acute{i} \quad \text{stv}\acute{a}r\acute{i}\text{ma} \quad \text{stv}\acute{a}r\acute{i} \quad \text{stv}\acute{a}r\acute{i}\text{ma} \quad \text{stv}\acute{a}r\acute{i}\text{ma}
\end{aligned}$$

Lsg₂ 及び GDILpl に於いて規則 d を用い、語幹を/stv'ar-/と表示する：

$$\begin{aligned}
\text{Lsg}/\text{stv}'\text{ar}\acute{i}/ &>^{(4)} /stv\acute{a}r'\acute{i}/ &= \text{stv}\acute{a}r\acute{i} \\
\text{Gpl}/\text{stv}'\text{ar}\acute{i}/ &> /stv\acute{a}r'\acute{i}/ &= \text{stv}\acute{a}r\acute{i} \\
\text{DILpl}/\text{stv}'\text{ar}\acute{i}\text{ma}/ &> /stv\acute{a}r'\acute{i}ma/ &= \text{stv}\acute{a}r\acute{i}\text{ma}
\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
3.2.4 \quad & \text{sg} \quad b\acute{o}l\acute{e}st \quad b\acute{o}l\acute{e}st\acute{i} \quad b\acute{o}l\acute{e}st\acute{i} \quad b\acute{o}l\acute{e}st \quad b\acute{o}l\acute{e}st\acute{i} \quad b\acute{o}l\acute{e}st\acute{i} \quad \text{Isg}_2 b\acute{o}l\acute{e}š\acute{c}\acute{u} \quad \text{Lsg}_2 b\acute{o}l\acute{e}st\acute{i} \\
& \text{pl}_1 \quad b\acute{o}l\acute{e}st\acute{i} \quad b\acute{o}l\acute{e}st\acute{i} \quad b\acute{o}l\acute{e}st\acute{i}\text{ma} \quad b\acute{o}l\acute{e}st\acute{i} \quad b\acute{o}l\acute{e}st\acute{i}\text{ma} \quad b\acute{o}l\acute{e}st\acute{i}\text{ma} \\
& \text{pl}_2 \quad \text{〃} \quad b\acute{o}l\acute{e}st\acute{i} \quad b\acute{o}l\acute{e}st\acute{i}\text{ma} \quad \text{〃} \quad b\acute{o}l\acute{e}st\acute{i}\text{ma} \quad b\acute{o}l\acute{e}st\acute{i}\text{ma}
\end{aligned}$$

Isg₂に於いて st/šć が生じ、Lsg₂, GDILpl₂に規則 d を用いる。語幹は/b'ole#_{1st}/：

$$\begin{aligned}
\text{Nsg}/b'ole\#_{1st}/ &>^{(3)} /b'\acute{o}l\acute{e}st/ &= b\acute{o}l\acute{e}st \\
\text{Lsg}_1/b'ole\#_{1sti}/ &> /b'\acute{o}l\acute{e}st\acute{i}/ &= b\acute{o}l\acute{e}st\acute{i} \\
\text{Lsg}_2/b'ole\#_{1sti}/ &> /b'\acute{o}l\acute{e}st\acute{i}/ >^{(4)} /b\acute{o}l\acute{e}st'\acute{i}/ &= b\acute{o}l\acute{e}st\acute{i}
\end{aligned}$$

Gpl ₁ /b'ole # ₁ stī/	> ^③ /b'olestī/	= bölestī
Gpl ₂ /b'ole # ₁ stī/	> /b'olestī/ > ^④ /bolest'ī/	= bolēstī
DILpl ₁ /b'ole # ₁ stima/	> /b'olestima/	= bölestima
DILpl ₂ /b'ole # ₁ stima/	> /b'olestima/ > /bolest'ima/	= bolēstima

- 3.2.5 sg pāmēt pāmēti pāmēti pāmēt pāmēti pāmēti Lsg₂ pāmēcu Lsg₂ pamēti
 pl₁ pāmēti pāmēti pāmētima pāmēti pāmētima pāmētima
 pl₂ " pamēti pamētima " pamētima pamētima

語幹は/p'amēt-/。pl₂, Lsg₂ では規則 d を用いる。

Nsg/p'amēt/	= pāmēt
Lsg ₂ /p'amētju/ > /p'amēcu/	= pāmēcu
Lsg ₂ /p'amēti/ > ^④ /pamēt'ī/	= pamēti
Gpl ₁ /p'amēti/	= pāmēti
Gpl ₂ /p'amēti/ > /pamēt'ī/	= pamēti

- 3.2.6 sg māti mäterē mäteri māti mäterōm mäteri Asg₂ mäter
 pl mātēre mātērā mäterama mātēre mäterima mäterima

このパラダイムについてのみ hyper な表記を認めざるを得ない：/m'at_{er}'/

Nsg/m'ati/	= māti
Gsg/m'atēre/	= mātērē
Gpl/m'atērā/ > ^② /m'atērā/	= mātērā

- 3.2.7 sg rība rībē rībi rību rībōm rībi
 pl rībe rībā rībama rībe rībama rībama

語幹を/r'ib-/とすればよい：

Gpl/r'ibā/ > ^② /r'ibā/	= rībā
-----------------------------------	--------

- 3.2.8 sg žēna žēnē žēni žēnu žēnōm žēni
 pl žēne žēnā žēnama žēne žēnama žēnama

このパラダイムにも何の工夫もこらす必要がない。語幹は/žen'-/：

Gpl/žen'ā/ > ^② /žen'ā/	= žēnā
-----------------------------------	--------

- 3.2.9 sg slobōda slobōdē slobōdi slobōdu slobōdōm slobōdi
 pl slobōde slobōdā slobōdama slobōde slobōdama slobōdama

語幹は/slobod'-/：

Gpl/slobod'ā/ > ^② /slobōd'ā/	= slobōdā
---	-----------

- 3.2.10 sg dŕžava dŕžavē dŕžavi dŕžavu dŕžavōm dŕžavi
 pl dŕžve dŕžavā dŕžavima dŕžave dŕžavima dŕžavima

語幹は/drž'av-/。Gpl には規則 a の ictus 後退法則が働く。

	Gpl/drž'avā/	> ^② /drž'avā/	> ^④ /d'ržāvā/	= d'ržāvā		
3.2.11	sg ₁ strānka	strānkē	strānci	strāнку	strānkōm	strānci
	sg ₂ strānka	strānkē	strānci	strāнку	strānkōm	strānci
	pl ₁ strānke	strānākā	strānkama	strānke	strānkama	strānkama
	pl ₂ strānke	々	strānkama	strānke	strānkama	strānkama

一般に sg₂, pl₂ が用いられる。sg₁, pl₁ は /str'a#in#k-/ を, sg₂, pl₂ は /str'an#k-/ を語幹とする。

両者を /str'a(#i)n#k-/ と表示できる。

Nsg ₁ /str'a#in#ka/	> ^④ /str'a#inka/	> ^③ /str'ānka/	= strānak
Nsg ₂ /str'an#ka/	> /str'anka/	> /str'anka/	= strānka
Gpl/str'a(#i)n#kā/	> /str'a(#i)nakā/	> /str'anakā/	> ^② /str'anākā/ = strānākā

3.2.12	sg	dúplja	dúpljē	dúplji	dúplju	dúpljōm	dúplji
	pl	dúplje	dúpljī	dúpljama	dúplje	dúpljama	dúpljama
						Gpl ₂ dúpljā	Gpl ₃ dúpālja

Gpl₃ は現代では稀用である。Gpl₃ を除けば語幹を /dúplj-/ と記せばよい：

Gpl ₁ /dúplj'i/	= dúpljī
Gpl ₂ /dúplj'ā/	= dúpljā

Gpl₃ を含むパラダイムは /dúp#lj-/ を語幹とし, Gpl₃ に規則 a を用いることになる：

	Gpl ₃ /dūp#zlj'ā/	> ^④ /dūpalj'ā/	> ^⑤ /d'ūpālġā/	= dūpālġā		
3.2.13	sg ckā	ckē	ckī	ckū	ckōm	ckī
	pl ckē	cākā	ckāma	ckē	ckāma	ckāma

語幹を /c#k-/ とする。Dsg では例外的に k が c と交替しない。⁽⁵⁾

Nsg/c#k'a/	> ^④ /ck'a/	= ckā
Gsg/c#k'ē/	> /ck'ē/	= ckē
Gpl/c#k'ā/	> /cak'ā/	> ^② /cāk'ā/ = cākā

3.2.14	sg	vōda	vōdē	vōdi	vōdu	vōdōm	vōdi	Dsg ₂ vōdi	Asg ₂ vōdu
	pl	vōde	vōdā	vōdama	vōde	vōdama	vōdama	NApl ₂ vōde	

語幹は /vod-/。ictus 後退を生ずる DASg₁, NApl₁ と, 生じない DASg₂, NApl₂ とがあるが, 後者は明らかに他の形態からの analogy の産物であり, 前者が一般的である。

Nsg/vod'a/		= vōda
Dsg ₁ /vod'i/	> ^④ /v'odi/	= vōdi
Dsg ₂ /vod'i/		= vōdi
Asg ₁ /vod'u/	> /v'odu/	= vōdu
Asg ₂ /vod'u/		= vōdu
NApl ₁ /vod'e/	> /v'ode/	= vōde
NApl ₂ /vod'e/		= vōde

- 3.2.15 sg forinta forintē forinti forintu forintōm forinti
pl forinte fōrinātā forintama forinte forintama forintama Gpl₂ forintī

語尾 -ī を持つ Gpl₂を含めて語幹/forin#_{2t}'-/から導ける。Gpl₁には規則 b が働く。

Nsg/forin#_{2t}'a/ > ^④ /forint'a/ = forinta
Gpl₁/forin#_{2t}'ā/ > /forinat'a/ > ^② /forināt'ā/ > ^⑥ /for'inātā/ = fōrinātā
Gpl₂/forin#_{2t}'ī/ > /forint'ī/ = forintī

- 3.2.16 sg planina planinē planini plāninu planinōm planini Asg₂ planinu
pl plānine planinā planinama plānine planinama planinama NApl₂ planine

/planin'-/を語幹とし, Asg₁, NApl₁に ictus 後退法則を適応する。同法則を適応しない Asg₂, NApl₂は analogy による。

Nsg/planin'a/ = planina
Asg₁/planin'u/ > ^④ /pl'aninu/ = plāninu
Asg₂/planin'u/ = planinu
NApl₁/planin'e/ > /pl'anine/ = plānine
NApl₂/planin'e/ = planine

- 3.2.17 sg gláva glávē glávi glávu glávōm glávi
pl gláve glávā glávama gláve glávama glávama DILpl₂ glávama

DILpl₂を除いて/gláv'-/の具現と見られる。DAsg, NAplには規則 a を用いる。

Asg/gláv'u/ > ^④ /gl'āvu/ = glávu
Dsg/gláv'i/ > /gl'āvi/ = glávi
NApl/gláv'e/ > /gl'āve/ = gláve

DILpl₂に於ける語根母音短縮を条件付けるのは難しい。

- 3.2.18 sg kovërta kovërtē kovërti kovërtu kovërtōm kovërti
pl kovërte kōverātā kovërtama kovërte kovërtama kovërtama

語幹を/kover#_{2t}'-/とし, Gplに規則 b を用いればよい:

Gpl/kover#_{2t}'ā/ > ^④ /koverat'ā/ > ^② /koverāt'ā/ > ^⑥ /kov'erātā/ = kōverātā

3.3 中性名詞

- 3.3.1 sg sīto sīta sītu sīto sītom sītu 語幹/s'it'-/
pl sīta sītā sītima sīta sītima sītima

Nsg/s'ito/ = sīto
Gpl/s'itā/ > ^② /s'itā/ = sītā

- 3.3.2 sg sūnce sūnca sūnci sūnce sūncem sūnci 語幹/s'u#_{1n}#_{2c}-/
pl sūnca sūnācā sūncima sūnca sūncima sūncima
Nsg/s'u#_{1n}#_{2c}/ > ^④ /s'u#_{1n}ce/ > ^③ /s'ūnce/ = sūnce

Gpl/s'u#_{1n}#_{2cā}/ >^④ /s'u#_{1n}acā/ >^③ /s'unacā/ >^② /s'unācā/ = sūnācā

3.3.3

sg pèro pèra pèru pèro pèrom pèru
 pl pèra pèrā pèrima pèra pèrima pèrima 語幹/per'/'/
 Nsg/per'o/ = pèro
 Gpl/per'a/ >^② /pēr'a/ = pèrā

3.3.4

sg nèpce nèpca nèpcu nèpce nèpcem nèpcu
 pl nèpca nebācā nèpcima nèpca nèpcima nèpcima Gpl₂ nēbācā

語幹に/neb#_{2c}'-/を立て、Gpl₂に規則 a を用いる。逆行同化によって/nebc-/は/nepc-/に転じる。

Nsg/neb#_{2c}'e/ >^④ /nebc'e/ > /nepc'e/ = nèpce
 Gpl₁/neb#_{2c}'ā/ > /nebac'ā/ >^② /nebāc'ā/ = nebācā
 Gpl₂/neb#_{2c}'ā/ > /nebac'ā/ > /nebāc'ā/ >^④ /n'ebācā/ = nēbācā

3.3.5

sg dūgme dūgmeta dūgmetu dūgme dūgmetom dūgmetu
 pl dugmēta dugmētā dugmētima dugmēta dugmētima dugmētima

語幹を/dugm'e(t)-/と表記し、⁽⁶⁾ Nsg に於いて語尾 Ø が後続する時語幹末の t が削除されるものとする。pl に於いては規則 d が働く。

Nsg/dugm'e(t)Ø/ > /dugm'e/ = dūgme
 Gsg/dugm'e(t)a/ > /dugm'eta/ = dūgmeta
 Npl/dugm'e(t)a/ > /dugm'eta/ >^④ /dugmet'a/ = dugmēta
 Gpl/dugm'e(t)ā/ > /dugm'etā/ >^② /dugm'ētā/ > /dugmēt'ā/ = dugmētā

3.3.6

sg písmo písmā písmu písmo písmom písmu
 pl písmā písāmā písmima písmā písmima písmima

語幹に/pīs#_{2m}'-/を立て、Gpl に規則 a を用いる：

Nsg/pīs#_{2m}'o/ >^④ /pīsm'o/ = písmo
 Gpl/pīs#_{2m}'ā/ > /pīsam'ā/ >^② /pīsām'ā/ >^④ /p'īsāmā/ = písāmā

3.3.7

sg vrátlo vrátla vrátlu vrátlo vrátlom vrátlu
 pl vrátla vrátālā vrátlima vrátla vrátlima vrátlima Gpl₂ vrātālā

語幹に/vrā#_{2l}'-/を立て、Gpl₂に規則 a を用いる。Gpl₁では初頭音節が強勢を失い短縮される。

Nsg/vrāt#_{2l}'o/ >^④ /vrāt'l'o/ = vrátlo
 Gpl₁/vrāt#_{2l}'ā/ > /vrātāl'ā/ >^② /vrātāl'ā/ = 'vrātālā > vrātālā
 Gpl₂/vrāt#_{2l}'ā/ > /vrātāl'ā/ > /vrātāl'ā/ >^④ /vr'ātālā/ = vrātālā

3.3.8

sg zlō zlā zlū zlō zlōm zlū
 pl zlā zālā zlīma zlā zlīma zlīma 語幹/z#_{2l}'/'/

Nsg/z#_{2l}'o/ >^④ /zl'o/ = zlō
 Gpl/z#_{2l}'ā/ > /zal'ā/ >^② /zāl'ā/ = zālā

3.3.9	sg	iskústvo	iskústva	iskústvu	iskústvo	iskústvom	iskústvu
	pl	iskústva	iskústāvā	iskústvima	iskústva	iskústvima	iskústvima

語幹に/iskúst#zv-/を立て、Gplに規則bを用いる：

Nsg/iskúst#zv'o/	> ④ /iskústv'o/	= iskústvo
Gpl/iskúst#zv'ā/	> /iskústav'ā/ > ② /iskústāv'ā/ > ⑤ /isk'ústāvā/	= iskústāvā

3.3.10	sg	břdo	břda	břdu	břdo	břdom	břdu
	pl	břda	břdā	břdima	břda	břdima	břdima

/b'rd-/を語幹とし、plに於いて規則dを用いる：

Nsg/b'rd'o/	= břdo
Npl/b'rda/	> ④ /brd'a/ = břda
Gpl/b'rdā/	> ② /b'rdā/ > /b'rd'ā/ = břdā

3.3.11	sg	klŭpko	klŭpka	klŭpku	klŭpko	klŭpkom	klŭpku
	pl	klŭpka	klubākā	klŭpcima	klŭpka	klŭpcima	klŭpcima Gpl ₂ klŭbākā

語幹に/kl'ub#k-/を立て、Gpl₂以外のplに規則dを用いる：

Nsg/kl'ub#ko/	> ④ /kl'ubko/ > /kl'upko/	= klŭpko
Npl/kl'ub#ka/	> /kl'ubka/ > /kl'upka/ > ④ /klupk'a/	= klŭpka
Gpl/kl'ub#kā/	> /kl'ubakā/ > ② /kl'ubākā/ > /klubāk'ā/	= klubākā
Gpl ₂ /kl'ub#kā/	> /kl'ubakā/ > /kl'ubākā/	= klŭbākā

3.3.12	sg	měso	měsa	měsu	měso	měsom	měsu	語幹/m'ēs-/ pl.d
	pl	měsa	měsā	měsima	měsa	měsima	měsima	

Nsg/m'ěso/	= měso
Npl/m'ěsa/	> ④ /mēs'a/ = měsa
Gpl/m'ěsā/	> /mēs'ā/ = měsā

3.3.13	sg	sělo	sěla	sělu	sělo	sělom	sělu	語幹/sel'-/ pl.a
	pl	sěla	sělā	sělīma	sěla	sělīma	sělīma	

Nsg/sel'o/	= sělo
Npl/sel'a/	> ④ /s'ela/ = sěla
Gpl/sel'ā/	> ② /sel'ā/ > /s'elā/ = sělā

3.3.14	sg	plěme	plěmena	plěmenu	plěme	plěmenom	plěmenu	語幹/pl'eme(n)-/ pl.d
	pl	plemēna	plemēnā	plemēnima	plemēna	plemēnima	plemēnima	

Nsg/pl'eme(n)Ø/	> /pl'eme/	= plěme
Npl/pl'eme(n)a/	> /pl'emenā/ > ④ /plemen'a/	= plemēna
Gpl/pl'eme(n)ā/	> /pl'emenā/ > ② /pl'emēnā/ > /plemēn'ā/	= plemēnā

3.3.15	sg	vrěme	vrěmena	vrěmenu	vrěme	vrěmenom	vrěmenu
--------	----	-------	---------	---------	-------	----------	---------

pl vremèna vreménā vremènima vremène vremènima vremènima
 語幹に/vre(#_i)me(n)-/を立て、NAsgで語尾Øが後続すると語幹末のnが消去され、#_iが選択されるものとする。語幹末のnが選択されれば#_iは消去され、ictusは前音節に移る。

$$/vre(\overset{\leftarrow}{\#}_i)me(n)-/ = \begin{cases} /vre' \#_i me/ > /vre'eme/ & (\text{NAsg}) \\ /vr'emen-/ & (\text{NAsg 以外}) \end{cases}$$

$$\begin{aligned} \text{Nsg}/vre(\overset{\leftarrow}{\#}_i)me(n)\emptyset/ &> /vre' \#_i me/ > /vre'eme/ = vrèeme = vrème \\ \text{Gsg}/vre(\overset{\leftarrow}{\#}_i)me(n)a/ &> /vr'emenā/ &> /vr'emenā/ = vrèmena \\ \text{Npl}/vre(\overset{\leftarrow}{\#}_i)me(n)a/ &> /vr'emenā/ &> \textcircled{d} /vremen'a/ = vremèna \\ \text{Gpl}/vre(\overset{\leftarrow}{\#}_i)me(n)ā/ &> /vr'emenā/ &> \textcircled{2} /vr'emēnā/ > /vremēn'ā/ = vreménā \end{aligned}$$

3. 3. 16 sg táne táneta tánetu táne tánetom tánetu
 pl tanèta tanētā tanètima tanèta tanètima tanètima

語幹を/tān'e(t)-/とし、plで規則dが働くため第1音節が強勢を失って短縮される：

$$\begin{aligned} \text{Nsg}/tān'e(t)\emptyset/ &> /tān'e/ &> /tān'e/ = táne \\ \text{Gsg}/tān'e(t)a/ &> /tān'eta/ &> /tān'eta/ = táneta \\ \text{Npl}/tān'e(t)a/ &> /tān'eta/ &> \textcircled{d} /tānet'ā/ = *tānèta > tanèta \\ \text{Gpl}/tān'e(t)ā/ &> /tān'etā/ &> \textcircled{2} /tān'etā/ > /tānēt'ā/ = *tānētā > tanētā \end{aligned}$$

3. 3. 17 sg ćóše ćóšeta ćóšetu ćóše ćóšetom ćóšetu 語幹/ćo(#_i)š'e(t)-/ pl.d
 pl ćošèta ćošétā ćošètima ćošèta ćošètima ćošètima

$$\begin{aligned} \text{Nsg}/ćo(\#_i)š'e(t)\emptyset/ &> /ćo \#_i š'e/ > /ćoš'e/ &> /ćoš'e/ = ćóše \\ \text{Gsg}/ćo(\#_i)š'e(t)a/ &> /ćoš'eta/ &> /ćoš'eta/ = ćóšeta \\ \text{Npl}/ćo(\#_i)š'e(t)a/ &> /ćoš'eta/ &> \textcircled{d} /ćošet'a/ = ćošèta \\ \text{Gpl}/ćo(\#_i)š'e(t)ā/ &> /ćoš'etā/ &> \textcircled{2} /ćoš'etā/ > /ćošēt'ā/ = ćošétā \end{aligned}$$

3. 3. 18 sg₁ prāse prāseta prāsetu prāse prāsetom prāsetu 語幹/pr'a(#_i)se(t)-/
 sg₂ " prāseta prāsetu " prāsetom prāsetu " /pr'āse(t)-/

$$\begin{aligned} \text{Nsg}_1/pr'a(\#_i)se(t)\emptyset/ &> /pr'a \#_i se/ > /pr'āse/ &> /pr'āse/ = prāse \\ \text{Gsg}_1/pr'a(\#_i)se(t)a/ &> /pr'āseta/ &> /pr'āseta/ = prāseta \\ \text{Nsg}_2/pr'āse(t)\emptyset/ &> /pr'āse/ &> /pr'āse/ = prāse \\ \text{Gsg}_2/pr'āse(t)a/ &> /pr'āseta/ &> /pr'āseta/ = prāseta \end{aligned}$$

3. 3. 19 sg kljúse kljūseta kljūsetu kljúse kljūsetom kljūsetu 語幹/klju(#_i)s'e(t)-/
 Nsg/klju(#_i)s'e(t)\emptyset/ &> /klju \#_i s'e/ &> /kljūs'e/ &> /kljūs'e/ = kljúse
 Gsg/klju(#_i)s'e(t)a/ &> /kljūs'eta/ &> /kljūs'eta/ = kljūseta

3. 3. 20 sg gospòdstvo gospòdstva gospòdstvu gospòdstvo gospòdstvom gospòdstvu
 pl gospòdstva gòspodstāvā gospòdstvima gospòdstva gospòdstvima gospòdstvima

語幹を/gospodst #_{zv}'-/とし、Gplに規則bを用いる：

Nsg/gospodst #_v'o/ > ^④ /gospodstv'o/ = gospòdstvo
 Gpl/gospodst #_v'ä/ > ^② /gospodstav'ä/ > ^⑥ /gospodstäv'ä/ > ^⑥ /gosp'odstävä/ = gòspodstävä

3.4 呼格 (V)

呼格には相当のゆれが認められ一般化は難しい。ここでは概略を記すに留め、詳細についてはいずれ稿を新めるつもりである。

V に於いて ictus は語末に向って移動することはない。従って ictus は語幹の ictus を保持するか、語頭方向に移動するかの何れかである。語幹に於いて第1音節に ictus を持つ語は当然ながら ictus 後退は不可能である：

e.g. Vsg/zm'a(# _i)ju/	> ^③ /zm'aju/	=	zmāju
Vpl/zm'a(# _i)ji/	> ^③ /zm'aji/	=	zmāji
Vsg/j'a# _r # ₂ cu/	> ^④ /j'a# ₃ rcu/	> ^③ /j'ārcu/	= jārcu
Vpl/j'a# _r # ₂ ci/	> ^④ /j'a# ₃ rci/	> ^③ /j'ārci/	= jārci
Vsg/dr'u# ₃ ge/	> /dr'u# ₃ že/	> ^⑤ /dr'ūže/	= drūže
Vpl/dr'u# ₃ govi/		> ^⑤ /dr'ugovi/	= drūgovi
Vsg/r'atu/	= rātu	Vpl /r'atovi/	= rätovi
Vsg/gl'a# ₃ se/	> ^⑤ /gl'āse/	=	glāse
Vpl/gl'a# ₃ sovi/	> ^⑤ /gl'asovi/	=	glāsovi
Vsg/d'eve# ₁ re/	> ^③ /d'evere/	=	dēvere
Vpl/d'eve# ₁ ri/	> ^③ /d'everi/	=	dēveri
Vpl ₂ /d'eve# ₁ rovi/	> ^③ /d'everovi/	=	dēverovi
Vsg/sm'rti/	=	smṛti	
Vpl/sm'rti/	=	smṛti	
Vsg/k'o# ₁ sti/	> ^③ /k'osti/	=	kōsti
Vpl/k'o# ₁ sti/	> ^③ /k'osti/	=	kōsti
Vsg/m'ati/	=	māti	
Vpl/m'atere/	=	mātere	
Vsg/r'ibo/	=	rībo	
Vpl/r'ibe/	=	rībe	
Vsg/str'a(# _i)n# ₂ ko/	> ^④ /str'a(# _i)nko/	> ^③ /str'anko/	= strānko
Vpl/str'a(# _i)n# ₂ ke/	> ^④ /str'a(# _i)nke/	> ^③ /str'anke/	= strānke
Vsg/s'ito/	=	sīto	
Vpl/s'ita/	=	sīta	etc.

語幹に於いて第2音節以下に ictus を持つ語の Vsg は概して ictus を初頭音節に移動する（即ち規則 a が働く）と言いうるが、本来の ictus を保持する形態が並存する場合も多い：

- e.g. Vsg/konj'u/ >^(a) /k'onju/ = kǝnju
 Vsg/dvōr'e/ >^(a) /dv'ōre/ = dvōre
 Vsg/vr#ih'e/ > /vr#is'e/ >⁽³⁾ /vrš'e/ >^(a) /v'rše/ = vřše
 Vsg/lo#in#x'e/ > /lo#in#x'e/ >⁽⁴⁾ /lo#inč'e/ >⁽³⁾ /lōnč'e/ (>^(a) /l'ōnče/) = lōnče~lōnče
 Vsg/o#r#l'e/ >⁽⁴⁾ /ōrl'e/ (>^(a) /'ōrle/) = ōrle~ōrle
 Vsg/svedok'e/ > /svedoč'e/ >^(a) /sv'edoče/ = svědoče
 Vsg/jel'ene/ >^(a) /j'elene/ = jělene
 Vsg/pov'o#ju/ >⁽³⁾ /pov'uju/ (>^(a) /p'ovoju/) = pǝvoju~pǝvoju
 Vsg/pros#x'e/ > /pros#x'e/ >⁽³⁾ /prošč'e/ > /proš'e/ >^(a) /pr'ošče/ = prošče
 Vsg/ot#x'e/ > /ot#x'e/ >⁽⁴⁾ /otč'e/ > /oč'e/ >^(a) /'oče/ = ōče
 Vsg/čvōr#x'e/ > /čvōr#x'e/ >⁽⁴⁾ /čvōrč'e/ (>^(a) /čv'ōrče/) = čvōrče~čvōrče
 Vsg/žen'o/ (>^(a) /ž'eno/) = žěno~žěno
 Vsg/slobod'o/ (>^(a) /sl'obodo/) = slǝbodo~slobodo
 Vsg/drž'avo/ >^(a) /d'ržavo/ = dřžavo
 Vsg/vod'o/ (>^(a) /v'odo/) = vǝdo~vǝdo
 Vsg/planin'o/ (>^(a) /pl'anino/) = plānino~planino
 Vsg/glāv'o/ >^(a) /gl'āvo/ = glāvo etc.

中性名詞で ictus 後退を生ずるものは少数である：

- Vsg/dēt'e/ >^(a) /d'ēte/ = dēte cf. Nsg dēte
 Vsg/brāc'o/ >^(a) /br'āco/ = brāco cf. Nsg brāco etc

語幹に於いて第3音節以下に ictus を持つ語には、Vsg に於いて1音節だけ ictus を後退させる異形態を持つものも散見される（選択的規則 e とする）：

- e.g. Vsg/sinōv#x'e/ > /sinōv#x'e/ >⁽⁴⁾ /sinōvč'e/ >^(a) /s'inōvče/ = sinōvče
 >^(v) /sin'ōvče/ = sinōvče
 Vsg/čovek'e/ > /čoveč'e/ >^(a) /č'oveče/ = čǝveče
 >^(v) /čov'eče/ = čǝveče
 Vsg/nitko#iv'e/ >⁽³⁾ /nitkov'e/ >^(a) /n'itkove/ = nǝtkove
 >^(v) /nitk'ove/ = nitkove
 Vsg/tuđin#x'e/ >⁽⁴⁾ /tuđinč'e/ (>^(a) /t'uđinče/) = tǝđinče~tuđinče
 >^(v) /tuđ'inče/ = tǝđinče etc.

Vpl は概して Npl と同形であるが、次のように例外的に ictus を後退させる異形態を持つものもある：

- Vpl/vr#ih'i/ > /vr#is'i/ >⁽³⁾ /vrs'i/ (>^(a) /v'rsi/) = vřsi~vřsi
 Vpl/pros#x'i/ >⁽⁴⁾ /prosc'i/ (>^(a) /pr'osci/) = prǝsci~prǝsci

Vpl/nitko # _{iv} 'i/	> ^③ /nitkov'i/	(> ^④ /n'itkovi/) = nĭtkovi ~ nitkôvi
Vpl/sinôv # _{zc} 'i/	> ^④ /sinôvc'i/	(> ^④ /s'inôvci/) = sĭnôvci ~ sinôvci
Vpl/kovâc'i/	(> ^③ /k'ovâči/)	= kôvâči ~ kovâči etc.

筆者の調査した限りでは V は上記の何れかの説明に該当するが、特に異形態については資料の不足もあり全貌が明らかになったとは言えない。

4 結語

Garde の表記法に従ってセルボ・クロアチア語の複雑なアクセントを簡略化することができる。3章で筆者が考案した6つの強制的規則と5つの選択的規則を用いることによって Matešić が記述している72個の名詞曲用タイプのほとんどがすべてが生成される。3.2.17で説明を断念した DILpl の異形態と3.4で概略を記すに留めた V についてはいずれ稿を新めて再検討するつもりである。

付録として小論の扱った名詞すべての語幹音韻表示と適用される選択的規則を一覧表にしておく。

付録1 男性名詞

1—1 選択的規則なし

pl に於いて接尾辞 -ov/-ev- を持つ場合には (ov)/(ev) と記し、同接尾辞を持つ形と持たない形がある場合には同接尾辞の右肩に (•) を記す。

kōnj	/konj-'/	dvôr	/dvôr'(ov)•-/
kôvâc	/kov'âc-'/	zmâj ~ zmāj	/zma(# _i)j(ev)•-/
svêdok	/svedok-'/	vřh	/vr # _i h'(ov)•-/
nĭtkôv	/nitko # _{iv} '-/	jârac	/j'a # _{ar} # _{zc} (ev)•-/
päs	/p # _{zs} '-/	děd	/d'ed(ov)•-/
kotâlac	/kotal # _{zc} '-/ ~ /kotal # _{zc} '-/	ôtac	/ot # _{zc} '(ev)•-/
Gpl e		bûbanj	/b'u(# _i)b # _{znj} (ev)•-/

1—2 規則 a

lônac	/lo # _{in} # _{zc} '-/ pl a	ôrao	/o # _{ar} # _{zl} '(ov)•-/ Gplov a
lôvac	/lo # _{iv} # _{zc} '/(Gpl)a	órao	/o(# _i)r # _{zl} '(ov)•-/ Gplov a
čôvek ~ čôvek	/čov'ek-'/ (Nsg)a	čvôrak	/čvôr # _{zk} '(ov)•-/ Gplov a
jêlen	/jel'en-/ Gpl a		
pôvôj	/pov'o # _{ij} '-/ Gpl a		
prôsac	/pros # _{zc} '/(Gpl)a		

1—3 規則 b, c

sinovac	/sinov# _{2c} -'/Gpl b	tuđinac	/tuđin# _{2c} -'/ Gpl b
sinovac	/sino# _{3v} # _{2c} -'/Gpl b,c	staráčac	/starač# _{2c} -'/Gpl b
1—4 規則 d			
rāt	/r'at-/Lsg d	drûg	/dr'u(# ₁)g(ov)*-/Gpl d
		glās	/gl'a(# ₁)s(ov)-/Lsg,(N̄Apl) d ⁽⁸⁾
		děvēr	/d'eve# _{1r} (ov)*-/Gplov d
		vītēz	/v'ite(# ₁)z(ov)*-/N̄plov d
		slüčāj	/sl'uča(# ₁)j(ev)*-/Lsg,(N̄Apl) d
		vāl	/vāl(ov)*-/Lsg d
2 女性名詞			
2—1 選択的規則なし			
māti	/m'at _{er} ⁱ -/	slobōda	/slobod-'/
rība	/r'ib-/	strānka~strānka	/str'a(# ₁)n# _{2k} -/
žēna	/žen-'/	ckā	/c# _{2k} -'/
2—2 規則 a			
država	/drž'av-/Gpl a	vōda	/vod-'/DAsg,NApl a
dúplja	/dūp(# ₂)lj ⁱ -(Gpl# _{2ā})a ⁽⁹⁾		
2—3 規則 d			
smīt	/sm'rt-/Gpl d	bōlēst	/b'ole# _{1st} -(Lsg)N̄Apl d
kōst	/k'o# _{1st} -(Lsg)N̄Apl d	pāmēt	/p'amēt-(Lsg,NApl) d
stvār	/stv'ār-/Lsg,N̄Apl d		
3 中性名詞			
3—1 選択的規則なし			
sīto	/s'it-/	prāse	/pr'a(# ₁)se(t)-/~pr'āse(t)-/(sgのみ)
sūnce	/s'u# _{1n} # _{2c} -/	kljūse	/klju(# ₁)s'e(t)-/(sgのみ)
pēro	/per-'/	dēte	/de(# ₁)t'e(t)-/(sgのみ)
zlō	/z# _{2l} -'/		
3—2 規則 a			
nēpce	/neb# _{2c} -'/Gpl a	vrātlo	/vrāt# _{2l} -'/Gpl a
pīsmo	/pīs# _{2m} -'/Gpl a	sēlo	/sel-'/Gpl a
3—3 規則 b			
iskústvo	/isküst# _{2v} -'/Gpl b	gospōdstvo	/gospodst# _{2v} Gpl b
3—4 規則 d			
dūgme	/dugm'e(t)-/pl d	plēme	/pl'eme(n)-/pl d

bŕdo	/b'rd-/pl d	vréme	/vre([←] #)me(n)-/pl d
klŭpko	/kl'ub#k-/pl(Gpl)d	táne	/tān'e(t)-/pl d
měso	/m'ēs-/pl d	ćóše	/ćo(#)š'e(t)-/pl d

註

- (1) 小論執筆に際しセルボ・クロアチア語を母語とし、本学に於いてセルボ・クロアチア語を担当されている山岸 Ljiljana 氏には貴重な多くの御意見を賜った。記して深甚な謝意を表する。尚、小論の要旨については1988年6月25日立命館大学で開催された日本ロシア文学会関西支部研究発表会に於いて既に紹介した。主に紙面の制約の為詳細については割愛せざるを得なかったことは残念であるが、小論で用いる方法論が有用であることを示すことが小論の目的であり、詳細については他の品詞への応用や不測の誤ちの訂正と共に別な機会に稿を新めることにしたい。
- (2) Matešić (1970: 9)。
- (3) 尚、女性名詞にあっては DLsg に於いて同様の交替が生ずる。
- (4) Matica Srpska (1967-76) にはここに記した本来のパラダイムと共に類種の産物と解される l/o を生じない形 e.g. Gsg kotálca も並記されている。Толстой (1970) は後者のみ。その場合の語幹は/kotal#ɛc'/'。
- (5) この語を記載しているのは筆者の用いた文献中 Matešić (1970) のみである。
- (6) 語幹を /dugm'(et)-/ とし、語尾を -e, -a, -u... と分折することも可能であるが、NAsg に於いて語尾の t となる時直前の t が消去されるとする方が better であると考ええる。以下 plěme, vréme, táne, ćóše, kljúše についても同様に扱う。
- (7) 接尾辞 -ov- を持つ Gpl を Gpl ov と記す。同接尾辞を持たない Gpl には規則 a は適応されない。
- (8) GDILpl を NApl と略記する。
- (9) #2 と語尾 -a を持つ Gpl を Gpl #2a と略記する。その他の Gpl には規則 a は適応されない。

参考文献

- Belić, A. 1971. *Savremeni srpskohrvatski književni jezik*. Prvi deo. Glasovi i akcenat. Beograd.
- Benson, M. 1981². *Srpskohrvatsko-Engleski rečnik*. Prosveta. Beograd.
- Булаховский, Л. А. 1983. „Акцентологический комментарий к сербохорватскому языку.“ *Вибрані праці в п'яти томах*. Том п'ятий. Слав'янська акцентологія. «Наукова Думка». Київ.
- Дмитриев, П. А., Сафронов, Г.И. 1975. *Сербохорватский язык*. Издательство Ленинградского университета.
- Dordević, B. 1970. *Akcentat, retorika, versifikacija*. Elementi srpskohrvatske dikcije. Umetnička Akademija u Beogradu.
- Fischer-Jørgensen, E. 1978. 『音韻論総覧』林栄一監訳. 大修館書店.
- Garde, P. 1965. Accentuation et morphologie. *La linguistique*. Revue internationale de linguistique générale. 2. pp.25—39. Presses universitaires de France. Paris.
- . 1966. Les propriétés accentuelles des morphème serbo-croates. *Scando-Slavica*. XII. pp.152—172. Copenhagen. Munksgaard.
- . 1968. *L'accent*. Presses universitaires de France. Paris.
- . 1976. *Histoire de l'accentuation slave*. 1-2. Insitut d'études slaves. Paris.

- Gvozdanović, J. 1979. Descriptive and explanatory adequacy and co-existing language analyses. — illustrated by examples from Serbo-Croatian phonology. 『言語の科学』第7号. pp.181—191. 東京言語研究所.
- . 1980. *Tone and accent in standard Serbo-Croatian*. Schriften der Balkanommission Linguistische Abteilung XXVIII. Österreichische Akademie der Wissenschaften. Philosophisch-historische Klasse. Wien.
- 服部四郎. 1981. 「セルボクロアチア語のアクセント素について」『言語の科学』第8号. pp.157—164. 東京言語研究所.
- Hodge, T. 1965. Review on Lehiste & Ivić (1963). *Language*. Vol.41. No.3. pp.534—537.
- Ivić, P. 1958. *Die serbokroatischen Dialekte*. Ihre Struktur und Entwicklung. Erster Band. Allgemeines und die štokavische Dialektgruppe. Mouton & Co. 's-Gravenhage.
- . 1973. The place of prosodic phenomena in language structure. 『言語の科学』第4号. pp.103—138. 東京言語研究所.
- Lehiste, I. 1961. Some acoustic correlates of accent in Serbo-Croatian. *Phonetica* 7. No.2/3. pp.114—147.
- . & Ivić, P. 1963. *Accent in Serbocroatian*. An experimental study. Michigan Slavic Materials. Ann Arbor.
- Leskien, A. 1976². *Grammatik der Serbo-Kroatischen Sprache*. Heidelberg. Carl Winter.
- Matešić, J. 1970. *Der Wortakzent in der Serbo-Kroatischen Schriftsprache*. Heidelberg. Carl Winter.
- Matica Srpska. 1967-76. *Rečnik srpskohrvatskog jezika*. I-VI. Novi Sad — Zagreb.
- Московлевич, М.С. 1963. *Словарь русского и сербскохорватского языков*. Beograd. Naučna Knjiga.
- Попова, Т. П. 1986. *Сербско-хорватский язык*. Москва. «Высшая школа».
- Popović, I. 1960. *Geschichte der serbokroatischen Sprache*. Otto Harrassowitz. Wiesbaden.
- Resetar, M. 1946. *Mluvnice jazyka srbocharvatského*. Praktické učebnice slovanských jazyků. Praha. "Vesmír".
- Скляренко, В.Г. 1972. Рецензия на Lehiste & Ivić (1963). *Исследования по сербскохорватскому языку*. pp.376—380. Москва. АН СССР Институт славяноведения и балканистики.
- Stevanović. 1962¹⁰. *Gramatika srpskohrvatskog jezika za škole srednjeg obrazovanja*. Obod. Cetinje.
- Толстой, И. И. 1970³. *Сербскохорватско-русский словарь*. Москва. «Советская энциклопедия».
- Trager, G. L. 1940. Serbo-Croatian accents and quantities. *Language* Vol.16. No.1. pp.29—32.
- Trubetzkoy, N. S. 1958. *Grundzüge der Phonologie*. Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen. / 『音韻論の原理』 長嶋善朗訳. 岩波書店. 1980.
- Van Wijk, N. 1958². *Die Baltischen und Slavischen Akzent- und Intonationssysteme*. Ein Beitrag zur Erforschung der Baltisch-Slavischen Verwandtschaftsverhältnisse. Mouton & Co. 's-Gravenhage.
- 矢野通生. 1968. 「スラブ語動詞のアクセントに関する考察」『法文論叢』第24号文学篇. 熊本大学法文学会. pp.1—89.
- . 1977. 「スラブ語名詞アクセント論序説」『名古屋大学文学部研究論集』LXX. 文学24. pp.19—32. (1988年7月8日)